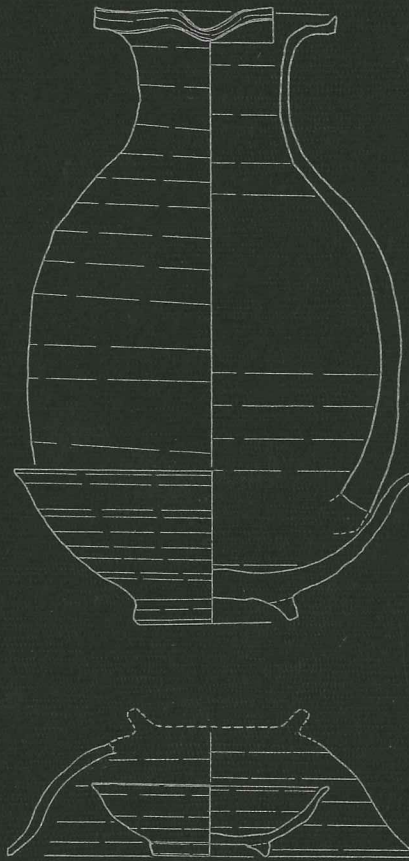


北ハサマ遺跡Ⅱ

静岡県磐田郡浅羽町
北ハサマ遺跡発掘調査報告書

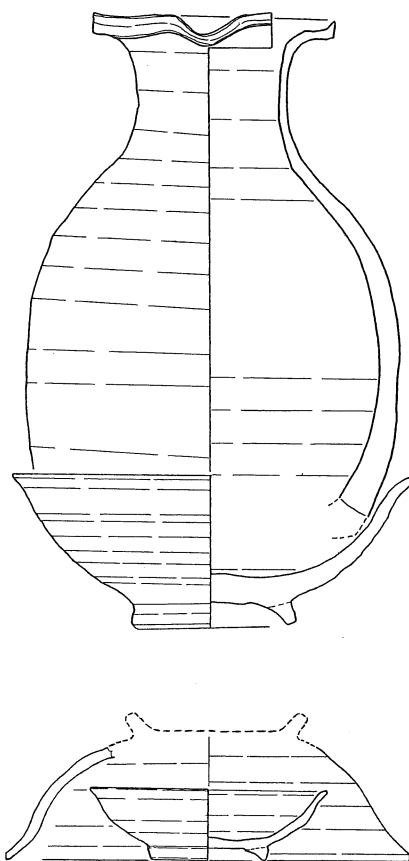


2001

浅羽町教育委員会

北ハサマ遺跡Ⅱ

静岡県磐田郡浅羽町
北ハサマ遺跡発掘調査報告書



2001

浅羽町教育委員会

例 言

- 1 本書は静岡県磐田郡浅羽町豊住に所在する、北ハサマ遺跡第2次発掘調査の報告書である。
- 2 現地調査は携帯・自動車電話の中継塔建設工事に伴う事前調査として株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海（1998年当時はエヌ・ティ・ティ東海移動通信網株式会社）の委託を受け、浅羽町教育委員会が調査主体となって実施した。報告書作成業務も同じく実施した。
- 3 試掘確認調査・発掘調査を1998年度に実施し、報告書作成業務を2000年度に実施した。
- 4 調査期間は試掘確認調査が1998年7月6～7日、発掘調査が1998年8月6日～10月22日。報告書作成業務の受託期間は2000年12月1日～2001年3月31日である。
- 5 1998年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 廣岡秀雄
調査担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 嘱託員 木曾昌司
事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 松川幸雄、係長 鈴木保裕 主任 山本義孝
（文化財担当）
調査作業員 荒井友彦、石川信夫、安間好美、大隈エミコ、大隈好雄、加藤みよ、金原藤江茂
澤田しな子、増田芳子、安井力
- 6 2000年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 廣岡秀雄、鈴木紘一（10月1日より）
担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 主任 山本義孝、嘱託員 木曾昌司
事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 土屋五郎、係長 鈴木利征、主任 山本義孝
（文化財担当）
整理作業員 加藤順子、鈴木仁美
- 7 本書の執筆、編集は山本が行い、第2章2は木曾が補佐した。出土遺物の実測、図版トレースは鈴木仁美、土器の復元は加藤順子、現地での写真撮影は木曾と山本が、出土遺物の写真撮影は山本がそれぞれ分担して行った。
- 8 基準杭設定は(株)フジヤマに委託して実施した。
- 9 本書に用いた水準は海拔、方位は座標北である。
- 10 本書に用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に基づいた。
- 11 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は浅羽町教育委員会が保管している。
- 12 出土遺物は後藤健一氏（湖西市教育委員会）と共に検討し、記述した。
- 13 報告書で用いた北ハサマ遺跡の名称は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所発刊の『新堀遺跡』では新堀遺跡の中に含めて扱っているが、本書では別の遺跡として分けて用いた。

北 ハ サ マ 遺 跡 II

目 次

例 言

第1章 調査経過と環境	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と方法	2
3 環境	4
第2章 調査成果	8
1 確認された遺構	8
2 出土した遺物	18
第3章 総 括	23
1 2次調査の成果	23
2 埋納遺構をめぐって	27

図 版 目 次

1 1. 調査区全景（南方向より）	2. 調査区南部分（東より）
2 1. 溝1・2、柵1・2・3（北より）	2. 溝4、柵4（南より）
3 1. 掘立柱建物1柱穴半載状況（西より）	2. 掘立柱建物1完掘状況（西より）
4 1. 溝1・2遺物出土状況（東より）	2. 掘立柱建物2、柵6（西より）
5 1. 溝1・2、柵1・2・3完掘状況（西より）	2. 溝4半載状況（東より）
6 1. 溝1土層断面 2. 溝2土層断面	3. 溝4土層断面
7 1. 溝5遺物出土状況（北より）	2. 溝5完掘状況（北より）
8 1. 井戸1・2検出状況（南より）	2. 井戸1・2半載状況（南より）
9 1. 井戸3検出状況（西より）	2. 井戸3半載状況（西より）
10 1. 土坑1遺物出土状況	2. 土器埋納遺構
11 1. 3次調査区全景（南より）	2. 3次調査区土層断面（東壁）
12 北ハサマ遺跡出土遺物1	
13 北ハサマ遺跡出土遺物2	
14 北ハサマ遺跡出土遺物3	
15 北ハサマ遺跡出土遺物4	

挿 図 目 次

図 1	北ハサマ遺跡の位置	1
図 2	浅羽低地を中心とした地形概念図	3
図 3	浅羽低地を中心とした奈良・平安時代の主要遺跡 (S= 1 /50,000)	5
図 4	北ハサマ遺跡 2 次調査区位置図 (S=1/2,500)	7
図 5	2 次調査区検出遺構図	8
図 6	2 次調査区遺構配置図	9
図 7	溝 1・2、柵 1・2・3 実測図	10
図 8	柵 5 実測図	11
図 9	掘立柱建物 1、溝 4、柵 4 実測図	12
図 10	土層断面図集成	14
図 11	掘立柱建物 2、柵 6、土坑 1、土器埋納遺構実測図	15
図 12	井戸 1・2、井戸 3 実測図	16
図 13	北ハサマ遺跡 3 次調査区全体図	17
図 14	北ハサマ遺跡出土遺物 1	20
図 15	北ハサマ遺跡出土遺物 2	21
図 16	北ハサマ遺跡出土遺物 3	22
図 17	北ハサマ遺跡遺構変遷図 1	23
図 18	北ハサマ遺跡遺構変遷図 2	24
図 19	新堀・北ハサマ遺跡の奈良・平安時代の遺構配置 (S= 1 /1,500)	25
図 20	大知波峠廃寺の埋納遺構	26

第1章 調査経過と環境

1 調査に至る経緯

1998年度に入ってすぐの4月上旬に、株式会社協和エクシオ東海支店の担当者より、携帯・自動車電話中継塔の建設を豊住字居廻415番地に計画しているので、その土地に埋蔵文化財が所在するかどうかという相談が、浅羽町教育委員会にあった。

これを受けて、社会教育課の文化財担当者は過去の周辺における埋蔵文化財調査の経緯を説明すると同時に、計画地にも遺構が所在する可能性が高いことを口頭で説明し、改めて第1号様式に基づき、書面にて「文化財の所在の有無について」照会していただくよう要請した。

4月13日付けでエヌ・ティ・ティ東海移動通信網株式会社から照会文書の提出があった。さっそく4月17日付けで、「現地で確認調査を実施し、地中にどの程度の遺構・遺物が埋蔵されているかの判断を行い、発掘調査の計画を作成する必要があるので、継続協議をお願いしたい」という旨の回答をおこなった。

その後、エヌ・ティ・ティ側から今後の計画をたてるために事業の全体計画案と資金計画案の作成を依頼され、5月13日付けで提出した。エヌ・ティ・ティ側ではこの内容を検討し、申請地における事業の実施を正式決定した。

6月末日には文化財保護法第57条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」の提出があり、7月1日付けで県教育委員会に進達すると同時に、文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を報告し事務的な手続きを完了した。

7月6・7日には試掘・確認調査を実施。その結果、予定されたように申請地内に遺構が所在することを確認。この成果に基づき、正式に発掘調査の資金計画書・工程表を作成し、7月8日に提出した。

現地調査にあたって文化財担当者が調査に専念し、少しでも事業を速やかに進めるため、事務面で協和エクシオの援助を依頼した。例えば、表土剥ぎのためのバックホーの手配、器材の調達は現物支給とし、測量の基準杭設定も会社側に依頼した。

以上のように、緊急な本発掘調査の実施にも関わらず、関係者の全面的な協力を得ることができ、8月3日付けで「発掘調査委託契約書」を締結し、現地調査が始まった。

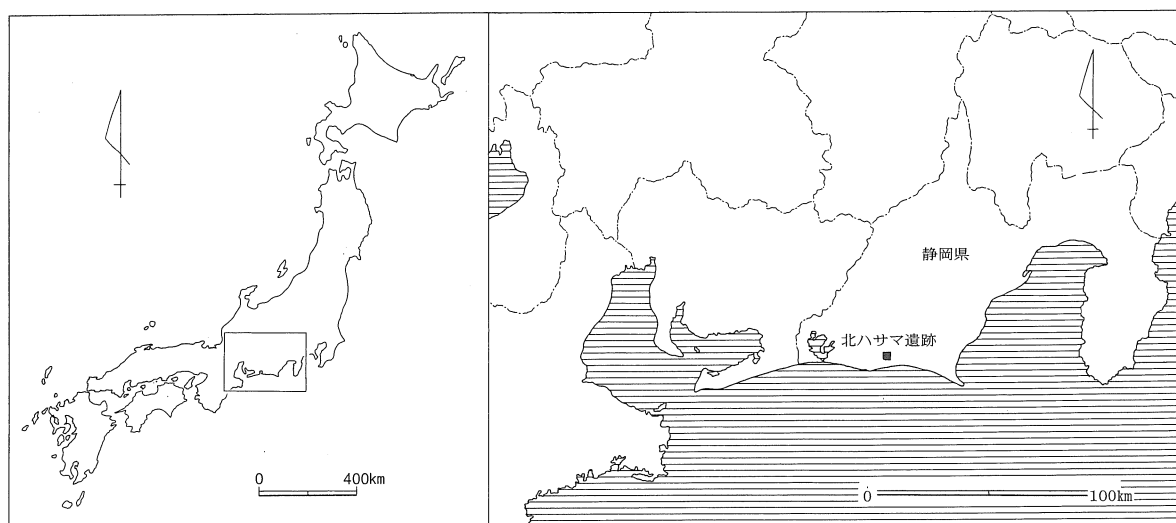


図1 北ハサマ遺跡の位置

2 調査の経過と方法

試掘・確認調査 調査の行程表を作成し、資金計画を立てることを目的とした試掘・確認調査を7月6日に開始した。学校給食センターの建設に先立ち、1989年に南隣で実施された1次調査の結果、遺構検出面が非常に浅い所にあることがわかっていたので、最初に、0.7m³のバックホーを用い工事範囲である16m×16mの範囲の表土を平らに掘り下げながら、遺構面の検出に努めた。

その結果、北寄りに土坑が2基、東壁に沿って溝状の遺構が一条、中央から南側にかけて東西方向に溝状の遺構が三条所在する様子が観察され、ほぼ全面に渡って遺構が存在することがわかった。

この時点で、後に溝2と命名する遺構の上面で山茶碗の小碗の上に大碗を伏せた土器埋納遺構が検出されたが、大碗の底部がバックホーの爪によってきれいに欠かれてしまった。この他に、瓦片も溝2の上面に顔を出し、初日から今後の調査の重要性を予感させるものとなった。

翌7日は、調査区の周り四方向に、後の本発掘調査に備えて断面観察を兼ねた排水溝を設定し、完掘後全面にブルーシートを掛け現地での作業を一時終了した。

発掘調査 本発掘調査は8月6日から再開した。シートを除去した後、動噴で全面を湿らし、遺構検出面を精査する作業に入る。調査は全て人力による掘削を行い、測量も作業員と共に全て自前で行った。遺構検出作業は12日まで続き、全ての遺構の輪郭が明らかになった時点で、100分の1スケールの遺構配置図を作成した。

13日から17日まで盆休みに入る。18日から遺構内の掘削に取りかかる。溝1・2を手始めに掘り下げ、19日には遺物の出土状態の写真撮影（図版4-1）を行う。その後溝1～6までを精査し遺物出土状況の図化、写真撮影を順次行う。24～25日は土坑1・土器埋納遺構の精査、図化、写真撮影を行う（図11）。27日には井戸1・2上面を検出、10月6日まで精査を続けるが完掘するに至らず、断面観察とプラン確認にとどめる（図12）。井戸3は9月19日～10月9日にかけて調査（図12）、土坑2は8月27日～9月14日にかけて調査した。

9月16～17日には台風により現場が水没し復旧作業を行う。しかし、23～24日にかけて再び記録的な集中豪雨が襲う。これにより町内の低地の多くが水没。現場付近一帯も水没した。26日に排水、ヘドロ除去等の復旧作業を行う。このように9月後半には度重なる水害により、作業が大幅に遅れることとなった。

28日に調査再開、この段階で柵群の精査に入り、10月22日の柵1・2完掘写真撮影まで調査を続ける。これと平行して掘立柱群の精査を進め、建物の検討を行う。10月9日には掘立柱建物1を検出、掘立柱建物2は15日に作業を終える。10月22日に全ての作業を終了し現地より器材を撤収した。



写真1 9月24日の現場周辺



写真2 現場の復旧作業



図2 浅羽低地を中心とした地形概念図

3 環 境

地理的環境 北ハサマ遺跡が所在する磐田郡浅羽町は静岡県西部（旧遠江国）に属し、県内で最も広い遠州海岸平野の東端に位置している。

町域は通称浅羽低地と呼ばれる低湿地が8割近くを占めており、田園地帯が広がる景観を呈している。町域の南は遠州灘に面して東西方向に砂州列が連なり、東は海拔264mの小笠山多聞天神社付近を最高所とする小笠山丘陵と接する。北と西は、掛川市八高山より発した原野谷川の流れによって概ね区切られ、平面的には三角形を呈している。

浅羽低地は大規模な排水工事が実施されるまでは排水不良地として地域住民を悩まし続けた歴史を持っている。低地の地質の多くは粘土・炭混じりの粘土・泥炭からなる。これは、縄文前期に始まる海進現象（7,000～6,500年前）によって低地の下流域に海水が流れ込み、深い入江（古磐田海）を形成したことから始まる。

海面の上昇が終わると同時に、入江奥の川が土砂を流し込み埋め立てが盛んとなる。太田川・原野谷川のような中河川では埋め立ての力は弱く、川筋沿いに砂礫を堆積する程度で、まわりの入江は濁水からの泥土を受け入れ、それが水底に堆積することとなる。

これと同時に海岸砂地が発達し、入江の出口が塞がれると（縄文中期と考えられている）、水域の塩分は徐々に薄くなって湖沼化し、ラグーン（潟湖）を形成する。入江の閉塞によって、河川沿いの堆積地形は保存されやすくなり、町域では原野谷川の旧本川（古川）と旧支川（古浅羽川）の蛇行流路と自然堤防が出現した。古浅羽川の微高地の出現は縄文中期～後期にかけての時期と推定されている。

古浅羽川によって古磐田海が分割されると、東に位置する小笠山丘陵の裾と、南の砂州列に囲まれた閉鎖性の強い水域が形成される。この水域（古浅羽海とも呼ばれている）は近世後期までその名残が池として残り、最後は地震に伴う地盤隆起によって消滅した。

自然堤防は後背湿地との比高差が1～2mと僅かなものだが、起伏の乏しい沖積低地の中にあっては限られた高乾地であり、弥生時代後期以降の多くの遺跡がこの部分に集中している。

北ハサマ遺跡や新堀、青木遺跡が位置する微高地は、古い原野谷川の支流と考えられる古浅羽川が形成した自然堤防に相当する。左岸の自然堤防上に位置するのが古墳時代前期からの拠点集落となる青木遺跡と本報告の北ハサマ遺跡で、新堀遺跡は右岸の自然堤防上に位置する集落である。これらの遺跡は古浅羽海と呼ばれる水域との関連性を意識しながら見ていく必要がある。

歴史的環境 北ハサマ遺跡は奈良時代から鎌倉時代初頭に至る遺跡である。この遺跡を理解するために、現在までに調査された奈良・平安時代の遺跡とその評価について概観しよう。

浅羽の地が文献上で確認されるのは、鎌倉幕府の編纂による『吾妻鏡』まで下ってしまう。従ってそれ以前の歴史を把握するには、間接的な記録が考古資料に頼らなければならない。例えば、古代において浅羽が何郡に属していたかという基本的な問題ですらも諸説があり定まっていない。

例えば『遠江風土記伝』を著した内山真竜は、同笠を中心とする遠州灘に面した一帯は長下郡に属していたと考え、原秀三郎氏は町域の多くの部分が長下郡であったと考えている¹⁾。しかし、近年では新堀遺跡の新しい資料などを踏まえて柴田稔氏²⁾は山名郡の範疇に含まれていたという考えを明らかにしており、筆者もこの意見に従っている。

奈良時代の遺物は町内各所の遺跡から採集され、広範な在り方を示している。しかし、発掘調査されたものが少なく、現在までに確認された奈良時代の遺構は、北部の古新田遺跡、潟湖西岸に位置する新堀遺跡と北ハサマ遺跡、その南の八幡西遺跡、権現山遺跡といった具合で、全体的な様相を復元するに



図3 浅羽低地を中心とした奈良・平安時代の主要遺跡 (S=1/50,000)

〔浅羽低地を中心とする古代の主要遺跡〕 (番号は図3に対応) A法多山寺 (法多山尊永寺) B赤尾山寺 (赤尾洪垂神社) C篠ヶ谷山寺 (篠ヶ谷山岩松寺) D馬場春日社 (浅羽八幡神社) E善能寺 F梅田春日社 (梅山八幡神社)
 1北ハサマ遺跡 2十二所遺跡 3古新田遺跡 4浅羽館 5新堀遺跡 6馬場遺跡、八幡西遺跡 7権現山遺跡 8西向遺跡
 9犬間遺跡 (磐田市) 10鎌田・鋤影遺跡 (磐田市) 11清ヶ谷古窯跡群 (大須賀町)

足る資料は得られていない。

次に遺跡ごとに記してみよう。1989年に調査が行われた古新田遺跡からは5世紀後半の豪族居宅以外に奈良時代の掘立柱建物跡も見つかっており、方向を同じくするものを同時代の建物と考えると、数棟で構成された建物群が存在する可能性が高い。

1990～91年にかけて調査が行われた新堀遺跡からは、区画溝（SD305）と考えられる遺構から奈良時代に属する遺物が大量に見つかり、その中に「山名厨」の墨書土器が含まれていた。この区画溝内側からは同時代の掘立柱建物跡6棟も見つかっている。調査者の佐野五十三氏は山名郡衙に関する倉庫ではないかと推定され、潟湖の東に位置する官窯の清ヶ谷古窯跡群との関連性を指摘し、そこで生産された瓦、須恵器の流通拠点ではなかったかとしている³⁾。

1998年に調査を行った北ハサマ遺跡からは、奈良時代のものと考えられる方形井戸と、これに伴う柵が見つかった。内容に関しては本報告で紹介する。

八幡西遺跡、権現山遺跡からは蔵骨器の中に火葬骨を埋葬した墓が確認されている。八幡西遺跡では2例、権現山遺跡では1例がそれぞれ報告されている。これらは、新堀遺跡のような公的機能を持った遺跡に関連する被葬者を想定することが可能で、類例の蓄積を期待している。

平安時代の遺物が採集できる遺跡は奈良時代同様、町内各所に及び、広範な在り方を示しているが、年代的には偏りを示している。例えば9～10世紀に属する遺物はごく限られており、遺跡の数も限定されている。これに対し、11世紀以降13世紀までの遺物を出土する遺跡は急激に増加し、遺構が発掘された遺跡も十二所遺跡、浅羽館、新堀遺跡、青木遺跡、馬場遺跡、権現山遺跡、西向遺跡と町域の各所に及んでいる。

この傾向を、柴田稔氏は清ヶ谷古窯跡群における灰釉陶器の操業開始や、荘園制の広がりとは一致すると指摘している⁴⁾。

古浅羽海西岸を中心とする町域の大部分は平安時代後期に成立した殿下渡領で勸学院領浅羽荘の範疇であったことがわかっており、北ハサマ遺跡・新堀遺跡はこの中で低地の中核を成す遺跡群と考えられる。

北部の小笠山段丘末端に相当する柴の荘司館伝承地からは、2000年の確認調査によって『吾妻鏡』にたびたび登場する浅羽荘司宗信の時代に符合する一辺50m規模の方形館の東南コーナーを確認した。

不明な点が多いが、地域を語るに足る歴史資料の蓄積が今後も少しずつ進んでいくだろう。

[註]

1) 原秀三郎 1983「第三編第二章第一節 国郡制の成立と山名・佐野郡家」『袋井市史 通史編』袋井市役所

2) 柴田稔 2000「第二編第四章第一節 遠江国府と浅羽」『浅羽町史 通史編』浅羽町

3) 佐野五十三 1993「第V章 まとめ 第1節 山名厨をめぐる・第2節 遠江地域からみた奈良時代の新堀遺跡」『新堀遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

4) 柴田稔 1997「第1部第四章 古代の遺跡 第一節時期別概要」『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』浅羽町

[参考文献]

加藤芳朗 1993「浅羽町新堀遺跡の地学的背景」『新堀遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

加藤芳朗 2000「第一編第二章第一節 平野の成立と変遷」『浅羽町史 通史編』浅羽町

柴田稔(編) 1997『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』浅羽町

松井一明 1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)本文編』静岡県教育委員会

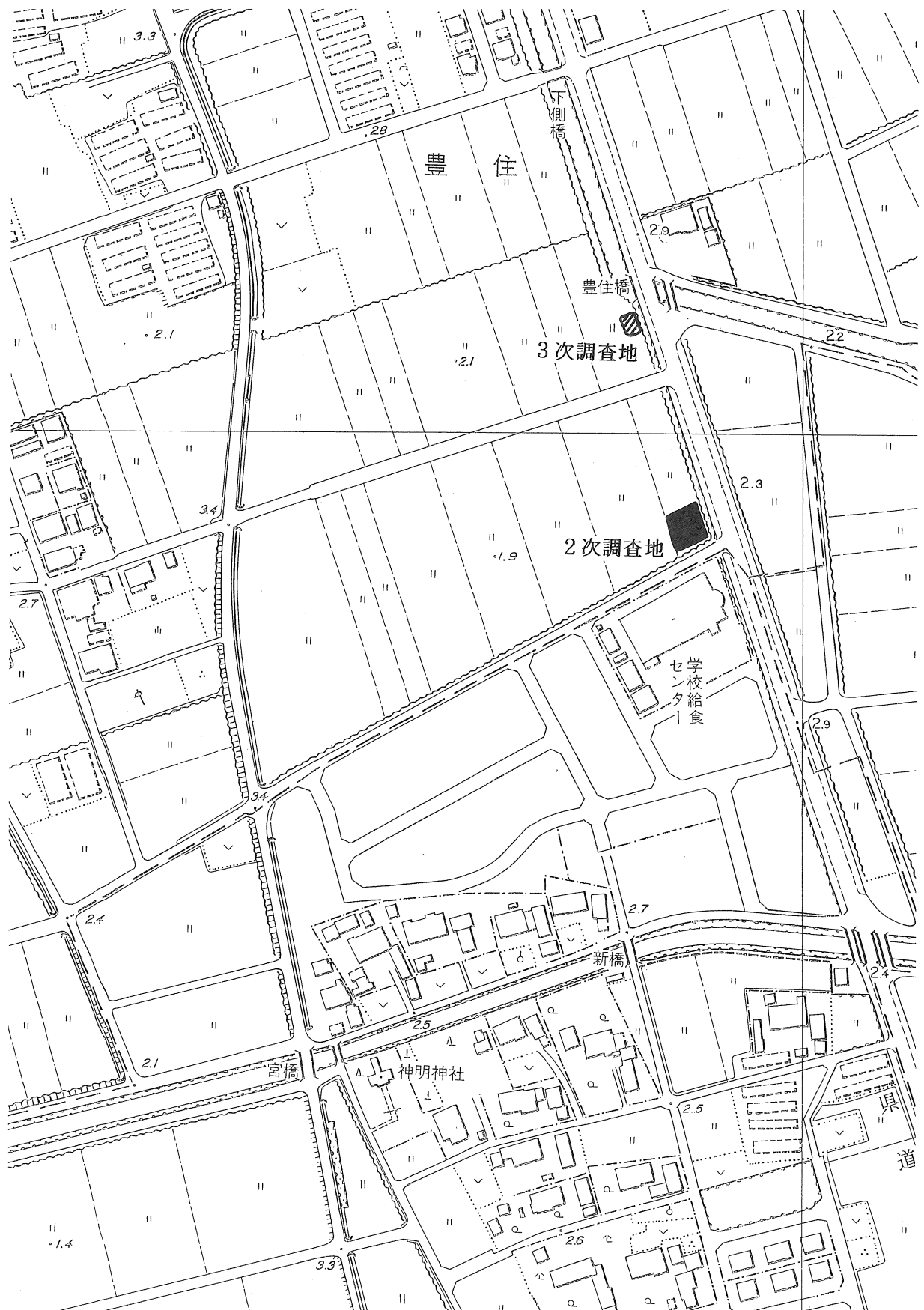


図4 北ハサマ遺跡2次調査区位置図 (S=1/2,500)

第2章 調査成果

1 確認された遺構

概要 2次調査は東西16m、南北16m、面積にして264㎡の範囲に対して行った。その結果、溝が6条、井戸が3基、土坑が2基、土器埋納遺構が1基、整地の痕跡が1ヶ所、掘立柱の柱穴が81基確認された。柱穴は整理の結果、2棟の建物と、6列の柵として理解した。以下、順を追って概観する。

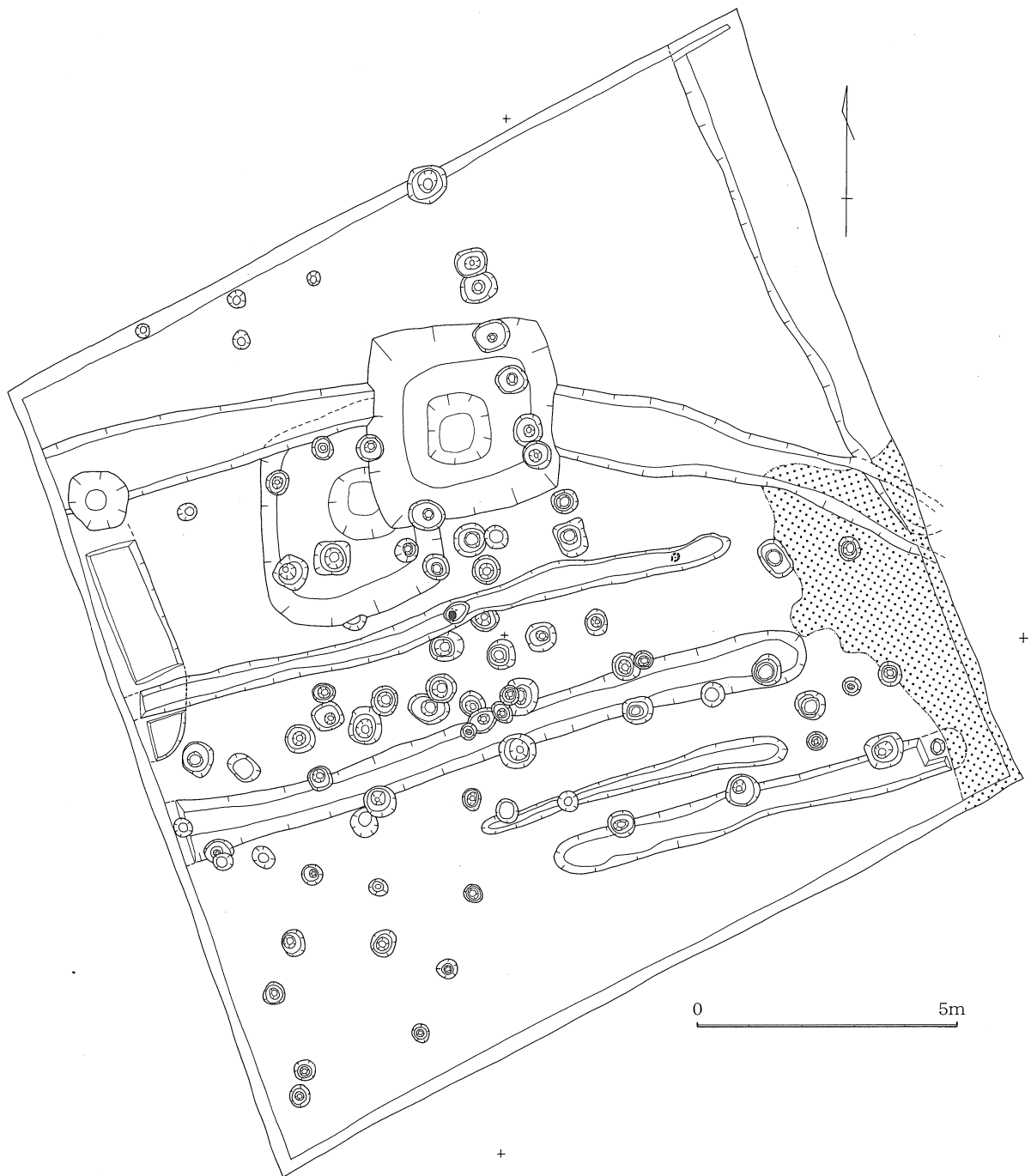


図5 2次調査区検出遺構図

基本土層 北ハサマ遺跡周辺は、圃場整備によって微高地が全て削平されており、表土をめくるとすぐに、遺構面が検出される。しかし、調査区の東側は僅かに傾斜し、浅く遺物包含層が堆積している。

溝1（図7、図版5-1） 調査区中央に東西方向に延びる遺構で、溝2と一対となった溝である。調査によって13m分を確認した。幅は0.9~1.2mで、深さ0.3m前後の規模である。遺構内覆土は2層に分けられ、上層が褐灰色粘質土、下層が黄褐色粘質土で、遺物の多くが上層から出土している。

この溝は掘立柱建物1の西側で止まり、建物とセット関係にあることを示している。

溝2（図7） 溝2は幅0.5~0.6m、深さ0.25m前後の規模で、溝1に比べると一回り小規模となっ

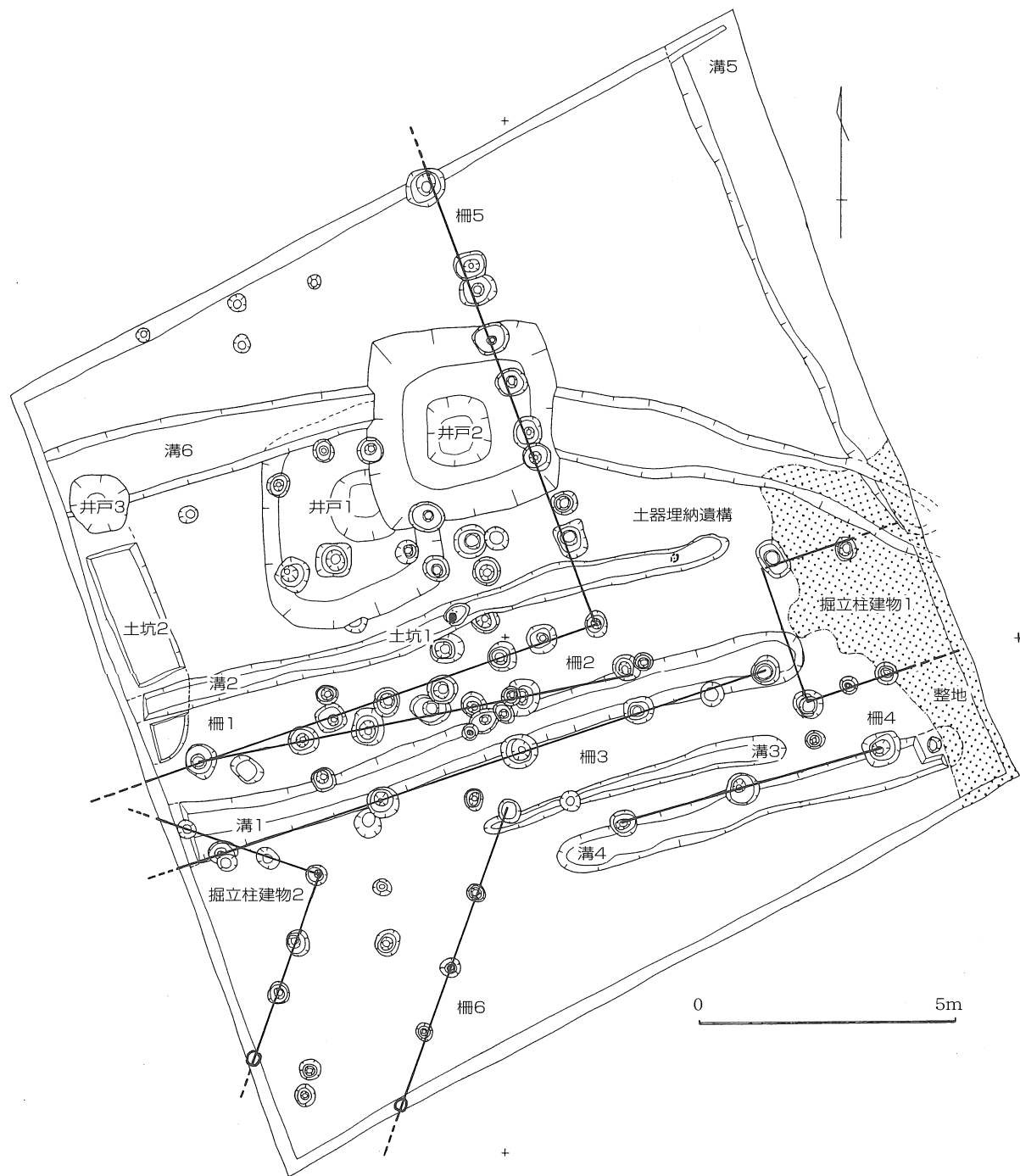


図6 2次調査区遺構配置図

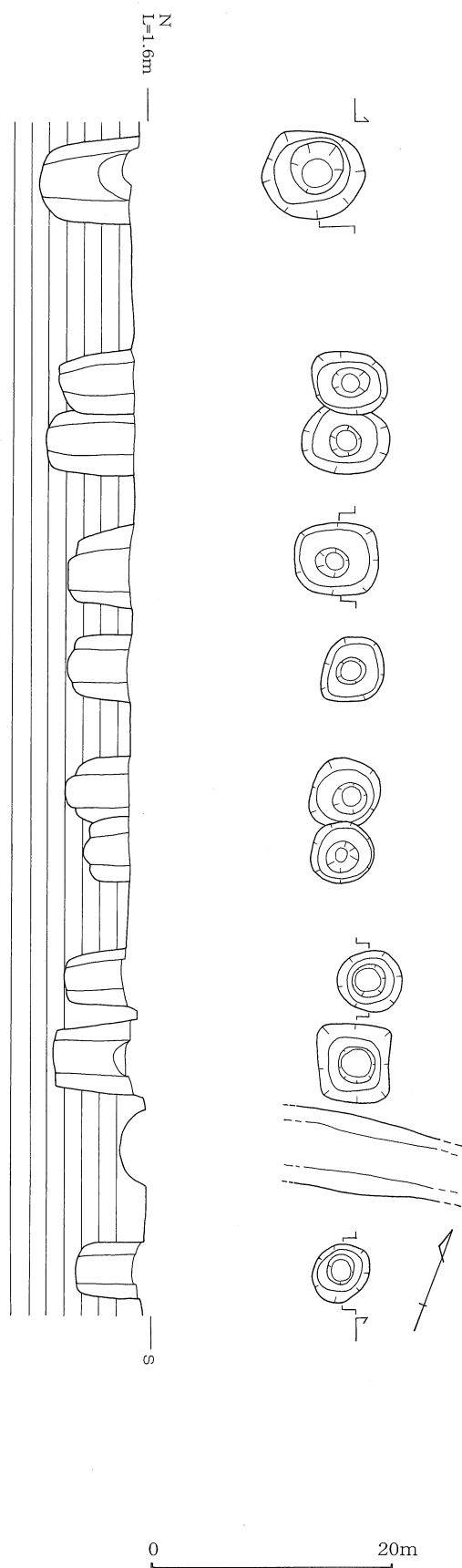


図8 柵5実測図

ている。この溝もやはり掘立柱建物1の西側で止まり、建物と一体化になっていたことがわかる。遺構内覆土も溝1と同じように上下2層に分けられ、遺物の多くが上層から出土した。特に溝1と溝2からは唯一瓦片が出土している。

特筆されるのは、溝2の中に土坑を掘り、祭祀をおこなった遺構が2ヶ所で発見されたことである(土坑1・土器埋納遺構)。詳細についてはそれぞれの項目で触れる。

柵1(図7断面a~b、図版2-1, 5-1)

溝1と2の間は幅1.6~2mあり、その中に溝と並行する掘立柱の柱穴が7穴分並び、これを柵1とした。図7には隣接する柵2の柱穴も2穴含めて示した。いずれも、直径0.5~0.6m、深さ0.6~0.7mの大きさである。

柵2(図7断面a~c、図版2-1, 5-1)

柵1に切られる関係の柵がもう一列確認され、これを柵2とした。柵はほぼ、東西方向に並んでいる。

柵3(図7断面d~e、図版2-1) 溝1の南に半分掛かるようにして4穴と、東隅の1穴は完全に溝内に入った場所から計5穴分が一行に並び、これを柵3とした。直径0.6~0.7m、深さ0.45m前後とほぼ同規模の柱穴群である。

これらは、溝1の遺構内覆土を取り除いた段階で、北側の掘り方の輪郭が確認されたことから、溝2の南肩に同時に設けられたことがわかる。

柵5(図8) 調査区の中央から北端にかけて柱穴が10穴分並び、これを柵5とした。他の遺構との切り合い関係は、柵5が井戸2を切り、溝6には切られている。この10穴は同時に存在するのではなく、建て替えが行われており、新しい柱穴の方が、一回り規模が小さくなっている。

柵5と柵1は直交することから、同時に存在する一連の柵と理解している。

溝3(図6、断面は図10) 溝1の南側、東寄り部分に位置する。長さは東西方向に6m、幅0.3~0.6m、深さ0.1mの小規模な溝。

溝4(図9、図版2-2, 5-2)

調査区東隅に位置する。溝1に平行し、掘立柱建物1の東西方向の柱の並びが止まる位置に合わせてこの

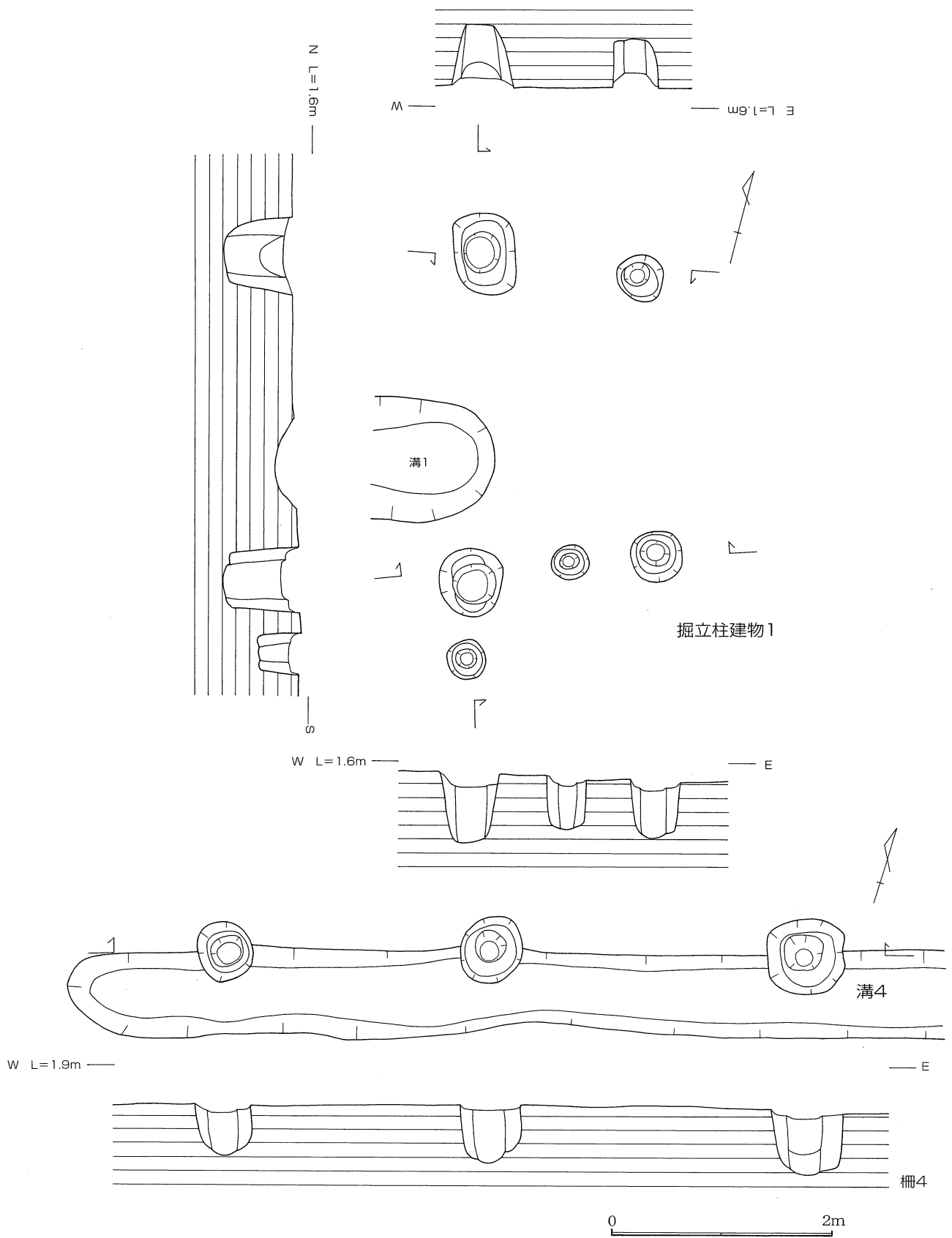


図9 掘立柱建物1、溝4、柵4実測図

溝も止まっている。長さ東西方向に8.1m、幅0.7~0.8m、深さ0.2m。

柵4（図9、図版2-2） 溝4の北肩に半分掛かるようにして3穴が並び、これを柵4とした。柱穴は西寄りの穴が一回り小さく直径0.5m、深さ0.45~0.5m、東の穴が直径0.7m、深さ0.6mとなっている。ここでも、南半分の掘り方の輪郭は溝4の覆土を掘り上げないと確認できなかった。

掘立柱建物1（図9、図版3） 溝1と2が止まる所に、「コ」の字型に並ぶ柱穴を5穴分確認した。柱穴群は周辺の溝との関係から判断して、門、あるいは木戸ではないかと考えている。

この建物の大部分が整地土の上に位置している。5穴のうち北西と南西隅のものは一回り大きく、直径0.6~0.7m、深さ0.6~0.7mの規模を持っている。

溝5（平面図は図6、断面図は図10、図版7） 調査区の東壁に平行して、南北方向に11m分確認した。柵5に対応する溝で、平面プランは全体の2/3を検出したものとみている。

北端での検出幅が1.3m、平均的な深さは0.3m前後、遺構内覆土は上下2層に分かれる。土層は図10中の4層が有機質を多く含む褐灰色粘質土で、ここに殆どの遺物が含まれていた。5層は緑灰色粘土。溝5は整地土層の上面から掘り込まれている。

溝6（図6） 調査区の北側半分寄りに緩く弧を描くように位置する。切り合う全ての遺構の中で一番新しいものである。長さ東西方向に17m分を確認した。幅0.9~1.4m、深さ東壁断面で0.15m、井戸2の断面で0.25mとなり、西に緩く傾斜している。

井戸1・2と切り合う部分では井戸の遺物を攪乱して溝内に遺物がみられるが、それ以外では殆ど出土していない。

掘立柱建物2（図11、図版4-2） 調査区の西南隅に位置する。東西方向二間分、南北方向三間分を確認した。この建物は他の遺構と方向も異なり、柱穴の規模も直径0.35~0.55m、深さ0.3~0.4mと他のものと比べても一回り小さい。

柵6（図11、図版4-2） 掘立柱建物2とセットになる柵と考えられる。やはりこの柱も他のものに比べると一回り小さい。

土坑1（図11、図版10-1） 溝2の中に土坑を掘り、祭祀をおこなったものである。土坑は、0.55×0.35m、深さ0.3mの楕円形で土坑底部に山茶碗を置き、その上に底を欠いた長頸壺を置いたものである。本来は、表紙の図のように、立てて呪術を行ったと考えている。土器の年代は12世紀前半である。

土坑2（図6） 調査区の西隅に位置する。南北5m、東西幅1m分を検出した。切り合いから溝2よりも古い、実態が良く分からない。

土器埋納遺構（図11、図版10-2） 溝2が埋まる過程で土器が納まる程度の穴を掘り、小碗の上に大碗を被せ密閉した空間を造りだした呪術を行ったと考えている。その組み合わせ状態を表紙の図で示した。土器の年代は12世紀中頃であり、溝を含む建物の廃絶時期をここに求めることができる。

井戸1・2（図12、図版8） 発掘区中央北寄りに位置する。井戸1を切って井戸2が造られている。度重なる水害のため完掘を断念し、井戸2と共に底部掘り方の平面プランのみを確認し、後はトレンチを設定して断面観察から全体像を復元した。このため、図12には底部掘り方が破線で示してある。

平面形態は隅丸方形でその中にテラスを設け、更に掘りくぼめて井戸枠を設けた構造と考えられる。井戸枠は抜かれたようで、断面に抜き取りの痕跡が観察できた。

掘り方は井戸1が3.4×4m、井戸2が3.6×3.7mの規模で、井戸2の深さが1.8mである。井戸1の掘り方内で柱穴が3穴みつかった。南西のものは後世のものかもしれないが、他の2穴は肩に掛かっており、しかも内側の輪郭が見えなかったのが井戸に関するものであろう。屋根架けをしていたのか、

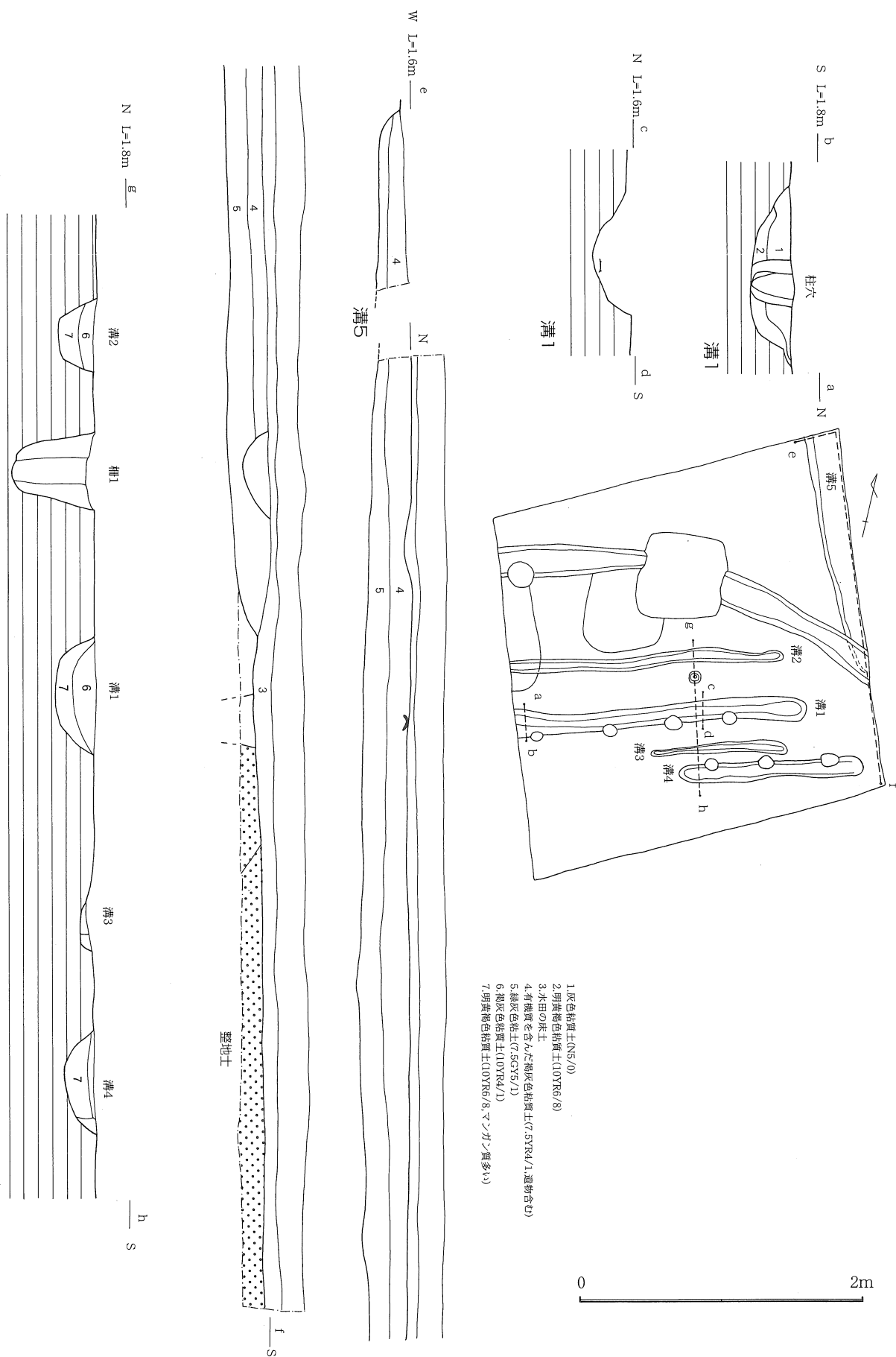


図10 土層断面図集成

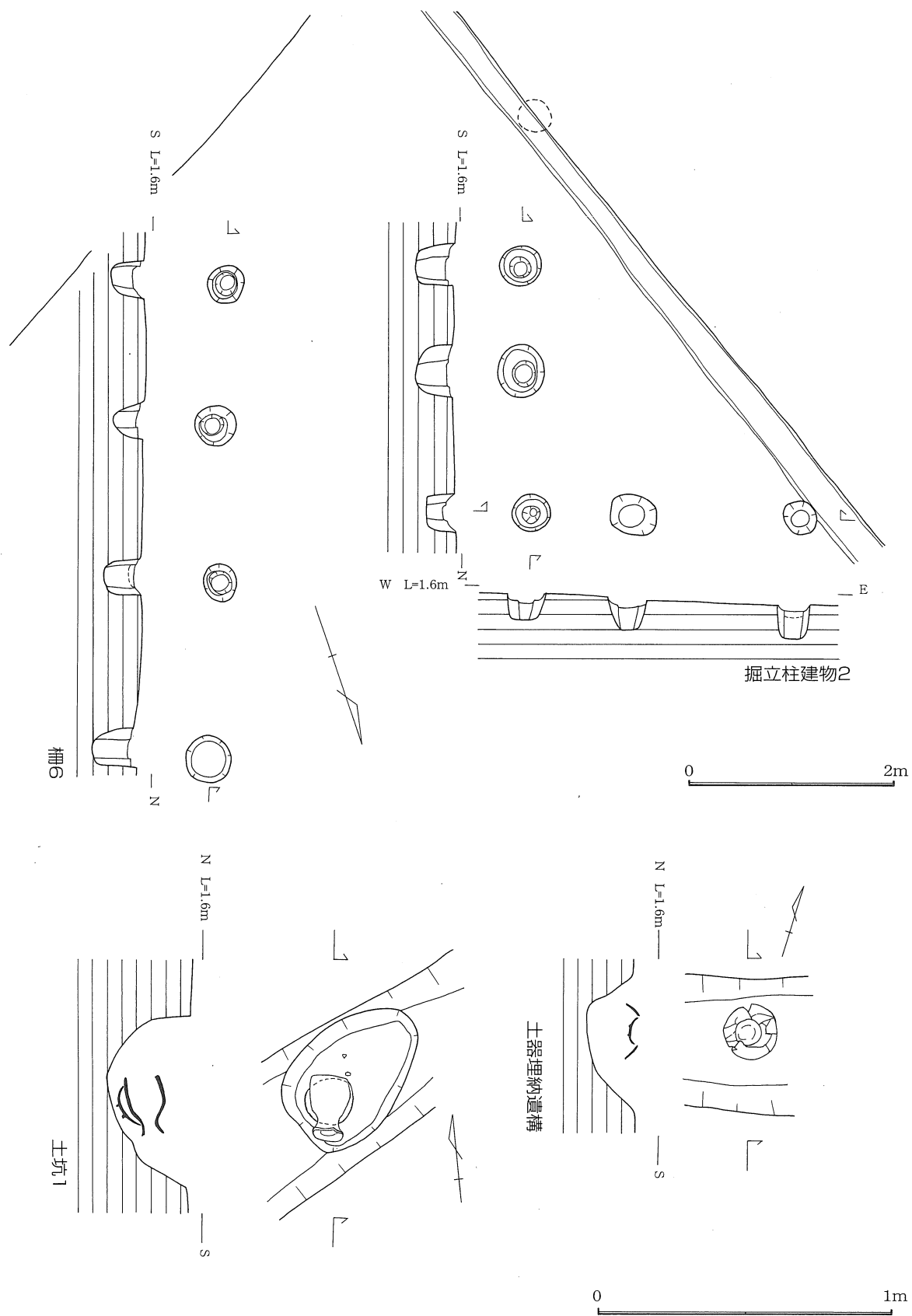


図11 掘立柱建物2、柵6、土坑1、土器埋納遺構実測図

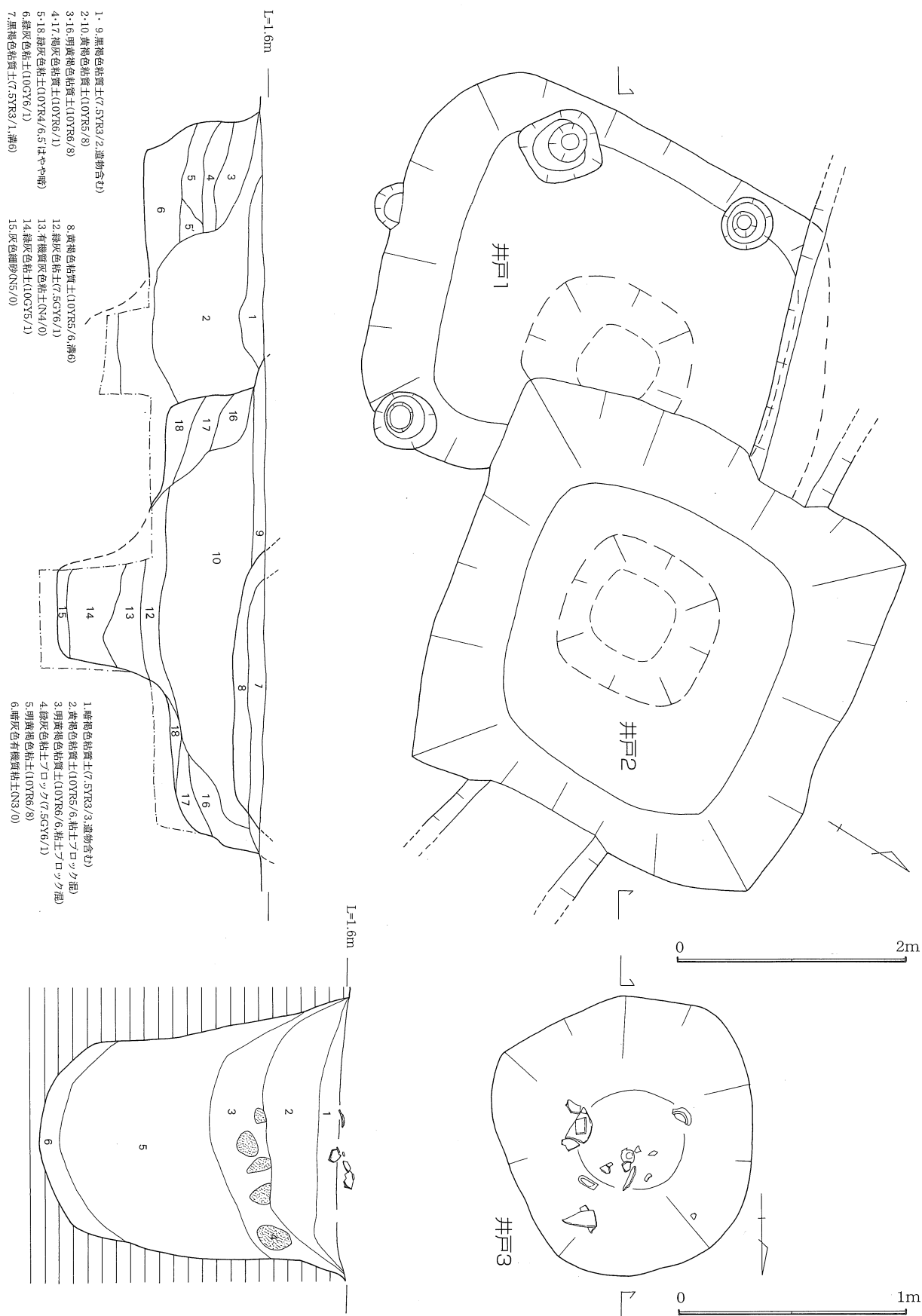


図12 井戸1・2、井戸3実測図

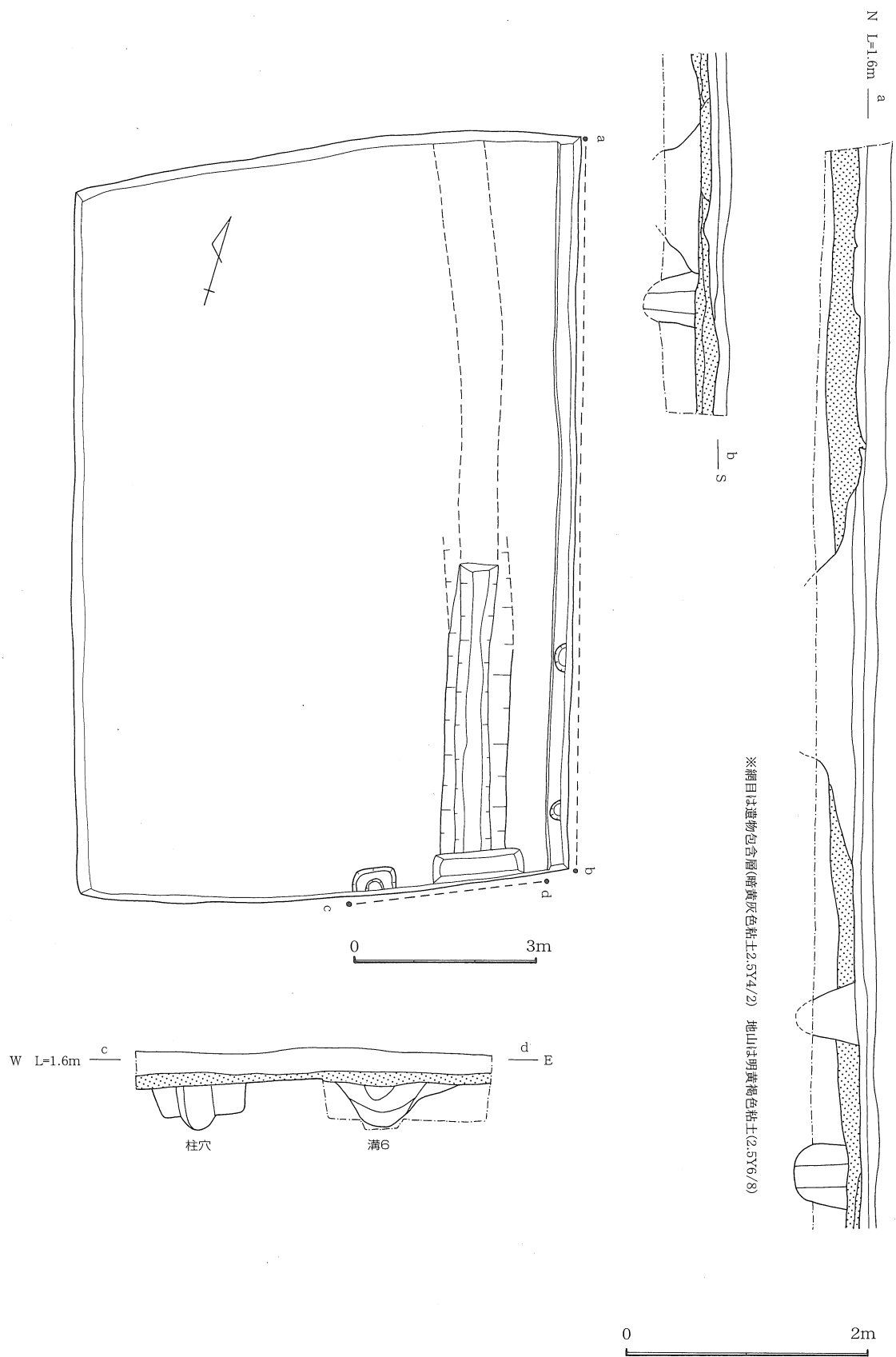


図13 北ハサマ遺跡3次調査区全体図

釣瓶の痕跡ではないだろうか。

遺物は最上面の黒褐色粘質土から多量に出土し、その下層からも僅かに出土している。

井戸3（図12、図版9） 調査区の北西に位置し、溝6によって切られていた。青木遺跡等で一般にみられる円形素掘りの井戸である。土坑の規模は1.1～1.25mの円形で、深さ1.35mある。

遺物は、殆どが最上層の暗褐色粘質土から出土している。

3次調査の遺構（図13、図版11） 2次調査が終盤にさしかかった9月の末日に、農地転用に伴う開発が北60mの地点で計画されたので、これに先立ち、確認調査を国庫補助事業として実施した。その結果、溝5の延長と考えられる溝（両者の関係は図19を参照）と、掘立柱の柱穴数基がみつかり、2次調査地で確認した土地利用が広範囲に及ぶものであることが分かった。

溝は、南壁の断面では、幅1m、深さ0.35mの規模を有し、更に北へ延びるが、調査区の中ほどからグライ化して明確ではない。ここで確認した遺構は、全て遺物包含層である青灰色粘土、暗黄灰色粘土の下面から掘り込まれている。

2 出土した遺物

2次調査によってパンコンテナケース約2箱分の遺物が出土した。しかし大半が細片で、図示できるものは図14～16に示した32点であった。写真図版にはNo.4の平瓶、No.34の瓦片も掲載した。

遺物の内訳は4点の瓦片、1点の砂岩質の砥石片、1点の土製支脚を除く全てが土器片で奈良時代の須恵器が3割、器種は坏蓋・坏身が殆どを占めている。土師器も同じく3割ほど見られ、判別の付く器種は甕と坏となっている。

これら奈良時代の遺物は殆どが井戸1・2から出土し、残りは溝5・6から出土している。しかし、溝5は灰釉陶器も混在するのでこの時代の遺構ではない。溝6も井戸1・2を切って造られているので、井戸内覆土の遺物が混入したものである。

この他に灰釉陶器と山茶碗が2割程見られ、あとは土師器片となっている。これらは、主に溝1・2から出土し（図版4-1）、特に瓦片は4点全てがここから出土した。

次に、図示した遺物の概要を記す。

1・2は須恵器高台坏で高台より底部が突出、または同レベルとなるもので『新堀遺跡』で示された奈良時代須恵器の分類に従うと坏BⅠタイプのものである。低部は回転ヘラケズリ調整。3はこれに対応する坏蓋で、全体で4点分が出土している。5は平瓶の把手の付け根部分。

22は内面黒色土器の坏で、底部外面に指頭圧痕が多数観察できる。25・26は土師器甕の口縁部で、口縁部を水平に外半させ、最大径が口縁端部にくる長胴甕。

以上が奈良時代のもので、出土点数に比べると図示できるものが少なく、細片が多くを占めている。

5は長頸壺の底部、底部は回転糸切り未調整痕を有する。胎土が精緻で東濃系のものと考えられる。

6は灰釉陶器の台付皿、焼成は甘い。豊橋市二川窯産ではないだろうか。7・8は灰釉陶器の碗、共に底部外面は回転ヘラケズリ調整を行い断面方形の付高台を有する。8は浜北市宮口窯産。

9は清ヶ谷産の大型碗A類で、口径16.4cmの大型。灰釉陶器Ⅲ期のもの。

10～15まではH72窯式に相当する灰釉陶器で、10～13までが底部外面に回転ヘラケズリ調整を有する。15は回転糸切り調整ののちナデ消している。10は二川窯産と考えられ、13・14は清ヶ谷産か。

16は清ヶ谷産の山茶碗。口径15.6～16cmと大型化し、口縁部は大きく外反し、体部は湾曲して大きく開く。Ⅰ期の碗D類に属する。土坑1から24の長頸壺と組み合わさって出土した。

出土遺物観察表

遺物番号	出土場所	器種	残存率(%)	法量(cm)			色調	備考
				器高	口径	底径		
1	溝5	須恵器坏身	20	3.9	14.6	10.0	灰青色	坏B1 8c 反転
2	井戸3	〃	(底部)20			9.2	〃	坏B1 8c 反転
3	溝5	須恵器坏蓋	25				灰色	8c
4	井戸3	須恵器平瓶	5				灰色	把手破片
5	溝6	灰釉陶器長頸壺	(底部)60			8.4	暗灰色	VI-古 9c前半 東濃系か
6	溝6	灰釉陶器皿	40	3.2	14.7	7.2	灰白色	K-14 9c前半 二川窯か
7	溝1	灰釉陶器碗	(底部)25			8.0	灰青色	K-14 碗A 9c前半 宮口窯 反転
8	井戸1	〃	30	3.8	11.9	7.1	灰白色	K-14 9c前半 宮口窯 反転
9	井戸3	〃	30	4.4	13.8	7.8	〃	O-53新 10c中頃
10	井戸3	〃	20			7.0	灰色	H-72 10c後半~11c初頭 二川窯 反転
11	表採	〃	(底部)30			5.8	〃	H-72? 10c後半~11c初頭 反転
12	井戸3	〃	(底部)15			5.8	〃	H-72 10c後半~11c初頭 反転
13	溝6	〃	20	4.0	14.8	5.6	灰色	H-72? 清ヶ谷 反転
14	井戸1	〃	15		15.8		〃	H-72? 清ヶ谷 反転
15	溝1	〃	15			6.0	灰白色	H-72~百代寺 反転 11c前半
16	土坑1	山茶碗	98	5.8	15.6	6.0	〃	山茶碗I-1期 12c前半 清ヶ谷
17	土器埋納遺構	〃	70		16.0		〃	山茶碗I-2期 12c中頃
18	溝2	〃	(底部)60			6.2	〃	12c後半~13c初頭 反転
19	溝2	〃	45			7.1	〃	12c後半~13c初頭 渥美・湖西
20	溝2	〃	(底部)98			6.8	〃	12c後半~13c初頭 渥美・湖西
21	土器埋納遺構	小碗	98	2.8	9.2	4.3	灰青色	山茶碗I-2期 12c中頃
22	溝6	内面黒色土器坏	15			6.5	にぶい橙色	
23	溝6	灰釉陶器長頸	65		(胴径)7.7	6.0	灰白色	H-72~百代寺
24	土坑1	長頸壺	80		(胴径)14.6	9.5	灰色	12c前半 渥美・湖西 底部を打ち欠いている
25	井戸1	土師器甕	(口縁)25		21.8		赤橙色	奈良時代
26	井戸3	土師器甕	(口縁)15		22.6		赤橙色	奈良時代
27	溝2	土師器甕	(口縁)10		22.4		褐灰色	清郷型
28	溝2 上層	伊勢型鍋	(口縁)15		14.0		淡褐色	
29	井戸1・2上面	土製支脚	40	(現存長)12.3		(下幅)6.7	淡橙色	断面六角形
30	井戸3	灰釉陶器大甕	(口縁)10		37.2		灰色	鉄釉
31	井戸1・2上面	灰釉陶器甕	5				暗灰色	
32	溝1	平瓦	5				淡橙色	格子目叩き
33	溝2	丸瓦	5				灰色	
34	溝1	平瓦	5				灰白色	磨滅激しい

17は土器埋納遺構から出土した山茶碗で21と組み合わせあって出土した。底部は打ち欠かれ、口縁は焼けひずみのため歪んでいる。

18~20は渥美・湖西産の山茶碗でⅡ期のものである。底部外面は回転糸切り調整で、19は粉殻痕が見られる。

21は山茶碗の小碗で須恵器のような青灰色を呈した東遠（遠江東部）系のもの。

23は東濃系のものと考えられる小型の長頸壺。底部は回転糸切り調整。24は湖西・渥美窯産の長頸壺。底部は故意に打ち欠かれ、欠損。

27は清郷型の甕、28は伊勢型の鍋、29は断面六角形を呈する土製支脚、奈良時代の土器に伴うものであろう。

30は須恵器大甕の口縁部、表面に刷毛で鉄釉を塗っている。猿投系か。31はこれと同時期の甕片。

32~34は瓦片、いずれも小片で摩滅しているが、格子目と縄目の叩き痕が観察できる。

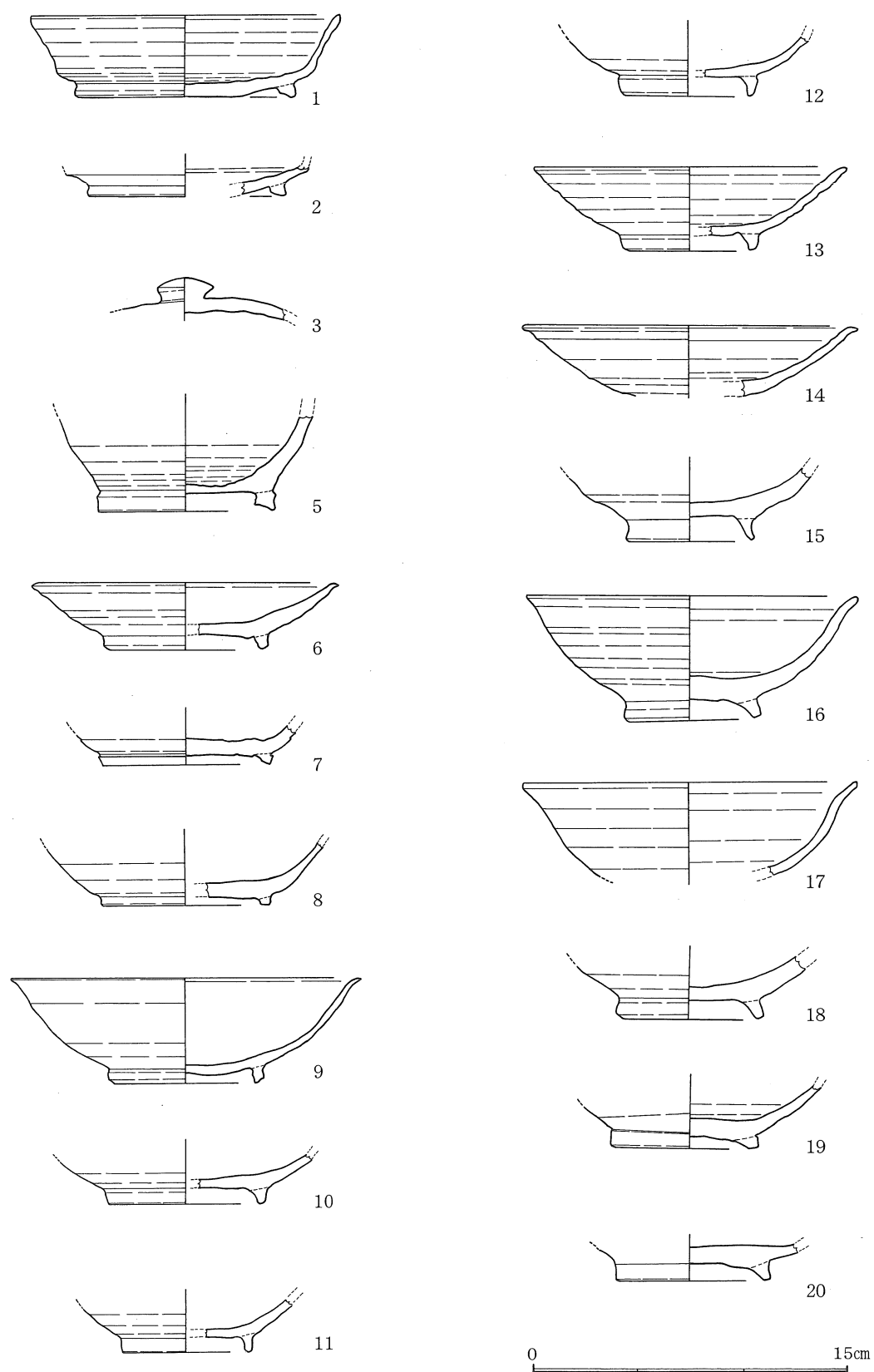


図14 北ハサマ遺跡出土遺物1

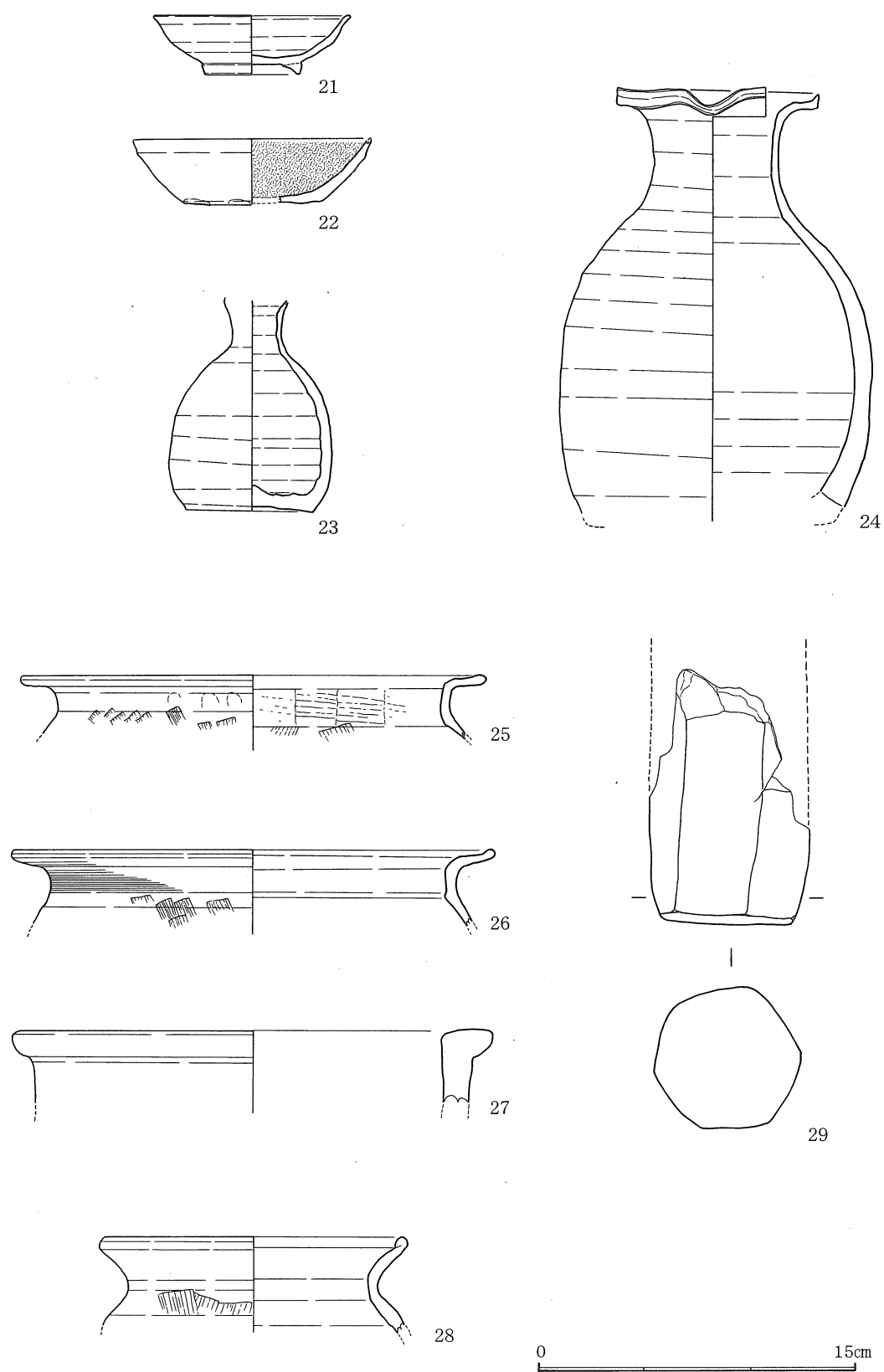
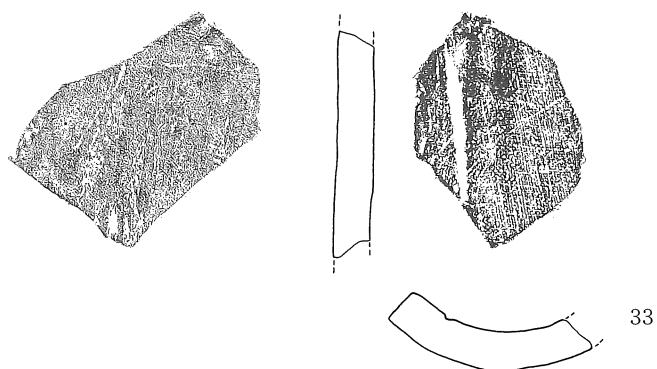
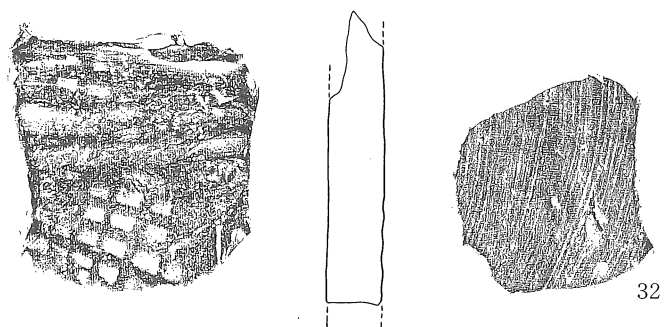
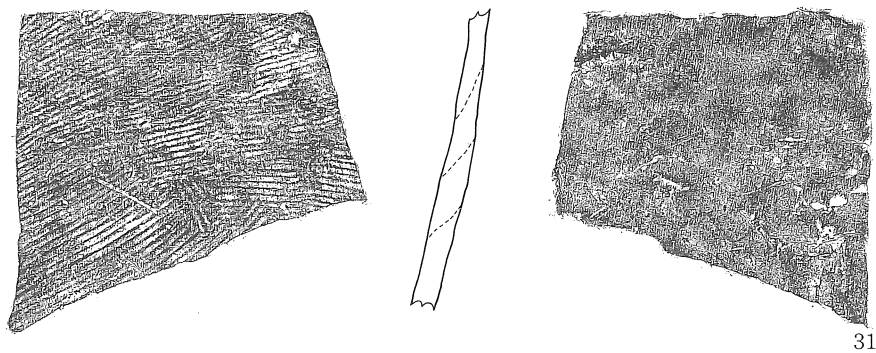
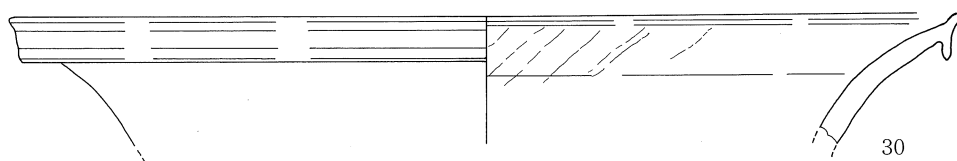


図15 北ハサマ遺跡出土遺物2



0 15cm

図16 北ハサマ遺跡出土遺物3

第3章 総括

1 2次調査の成果

これまで、北ハサマ遺跡2次調査の成果を概観してきた。ここで総括して纏めにかえたい。

遺跡の存続期間 北ハサマ遺跡2次調査の地点では出土遺物の検討から、8世紀中頃から井戸を中心とする区画が整備され、9世紀前半で一度衰退し、再び10世紀後半～12世紀前半にかけて柵列や門を備えた区画が整い、最後に12世紀後半～13世紀初頭に屋敷地となり終焉を迎えるものと整理される。

これは、過去に調査された北ハサマ遺跡1次調査や新堀遺跡の調査結果と大筋において矛盾するものではなく、この地点の遺構が、新堀遺跡を中心とする一連の遺構群との関連で位置付けなければならないことを示唆している。

遺構の変遷（図17・18） 2次調査の地点では、先に記したように、概ね三段階に整理することができる。そこでこれに従い、各遺構を出土遺物と切り合い関係から整理し、変遷を跡付けると次のようになる。

第Ⅰ期は井戸1・2とこれに関連する柵2が設けられる段階。8世紀後半～9世紀前半にかけての年代が想定される。

第Ⅱ期は東南隅で整地が行われ、大規模な土木工事がおこわれる。建物としては柵1とこれに付随する南北の溝1・2、直交する柵5と溝5、門と推定している掘立柱建物1等から成り立ち、最も整備される時期である。

10世紀後半～12世紀前半にかけての年代が想定され、12世紀中頃には廃絶したものと考えている。

第Ⅲ期は掘立柱建物2を中心に

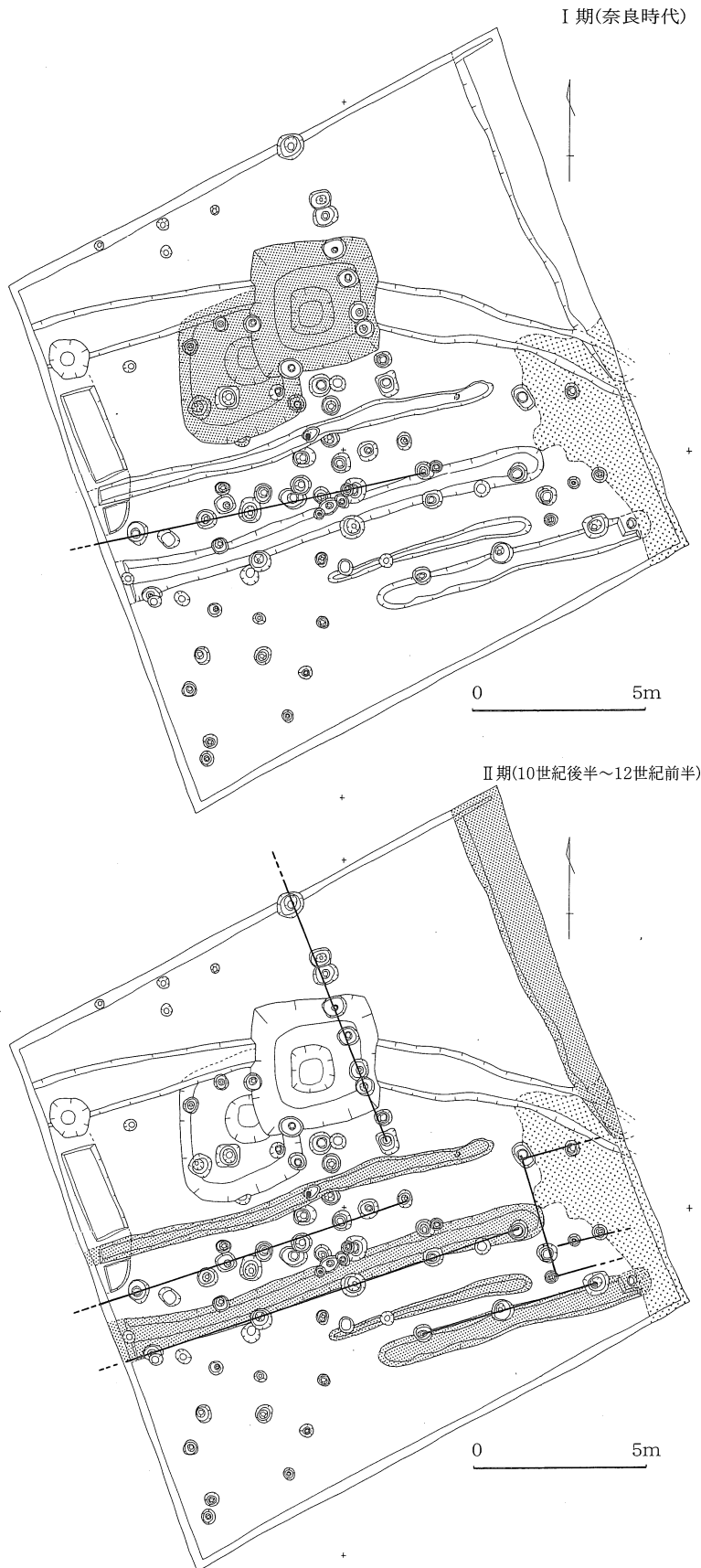


図17 北ハサマ遺跡遺構変遷図1

Ⅲ期(12世紀後半～13世紀前半)

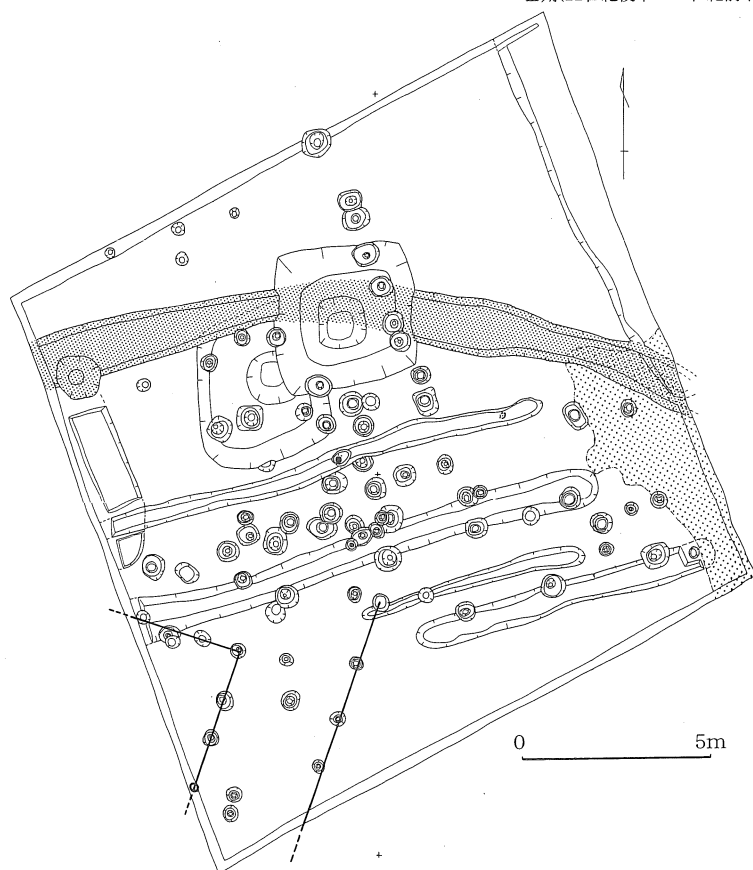


図18 北ハサマ遺跡遺構変遷図2

して、これに付随する柵6、屋敷地の区画溝と考えられる溝6と井戸3から成り立つ。

12世紀後半～13世紀初頭の年代が想定され、第Ⅰ・Ⅱ期との性格が大きく変化する時期といえる。

遺跡の性格 調査の結果を整理し、周辺の調査地における奈良・平安時代の主要遺構との関連を示したのが図19である。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、1991年に調査した地区で確認された、奈良時代に属する6棟の掘立柱建物群と区画溝とされるSD305、これらは特に8世紀中頃の年代を出土土器から与えることができるなら、調査者の佐野五十三氏が指摘するように、奈良時代の新堀遺跡は、潟湖の東側に位置する官窯としての清ヶ谷古窯跡群で生産された製品の流通に関わる遺跡であった。という考え方は、可能性が高いのではないだろうか。

今回の2次調査で、奈良時代の方形井戸を含む一角が確認され、同時代の瓦片（清ヶ谷製であろう）も出土したことにより、北ハサマ遺跡周辺に奈良時代の施設が広がり、場合によっては中心部が存在する可能性も出てきた。

地権者の話によると、調査地の西北の畑から耕作中に瓦片等がたくさん出土し、少し離れた（西北か）場所に「鬼街堂（きがいでう）」と呼ばれる御堂があったという伝承が残るという。参考になる話である。

北ハサマ遺跡では、10世紀後半以降再び建物が整備され、12世紀前半にかけて官衙的な規格を持った一角が出現する。これも、清ヶ谷古窯跡群で生産が始まって軌道に乗り、その製品の流通が盛んになる時期と一致するのではないだろうか。

このような推測が成り立つなら、新堀・北ハサマ遺跡を中心とする湿地に面した自然堤防上の微高地は、清ヶ谷古窯跡群で生産された製品を運搬する上で重要な位置を占めていたといえそうである。

ここで再び、旧地形の検討に戻そう。従来、清ヶ谷製品は水上交通手段を利用し、潟湖から現在前川と呼ばれる旧原野谷川を遡り、旧太田川を利用して今之浦から国府・国分寺に至るルート进行を想定していた。このルートからは、新堀・北ハサマ遺跡は外れてしまう。しかし、近年まで新堀の西側には広大な池と湿地が広がり（新堀とはこの池の水を吐かせるために掘られた排水路をいう）、これを利用するならば、最短距離で今之浦に至ることができるのである。このような地理的要因も加味することによって、

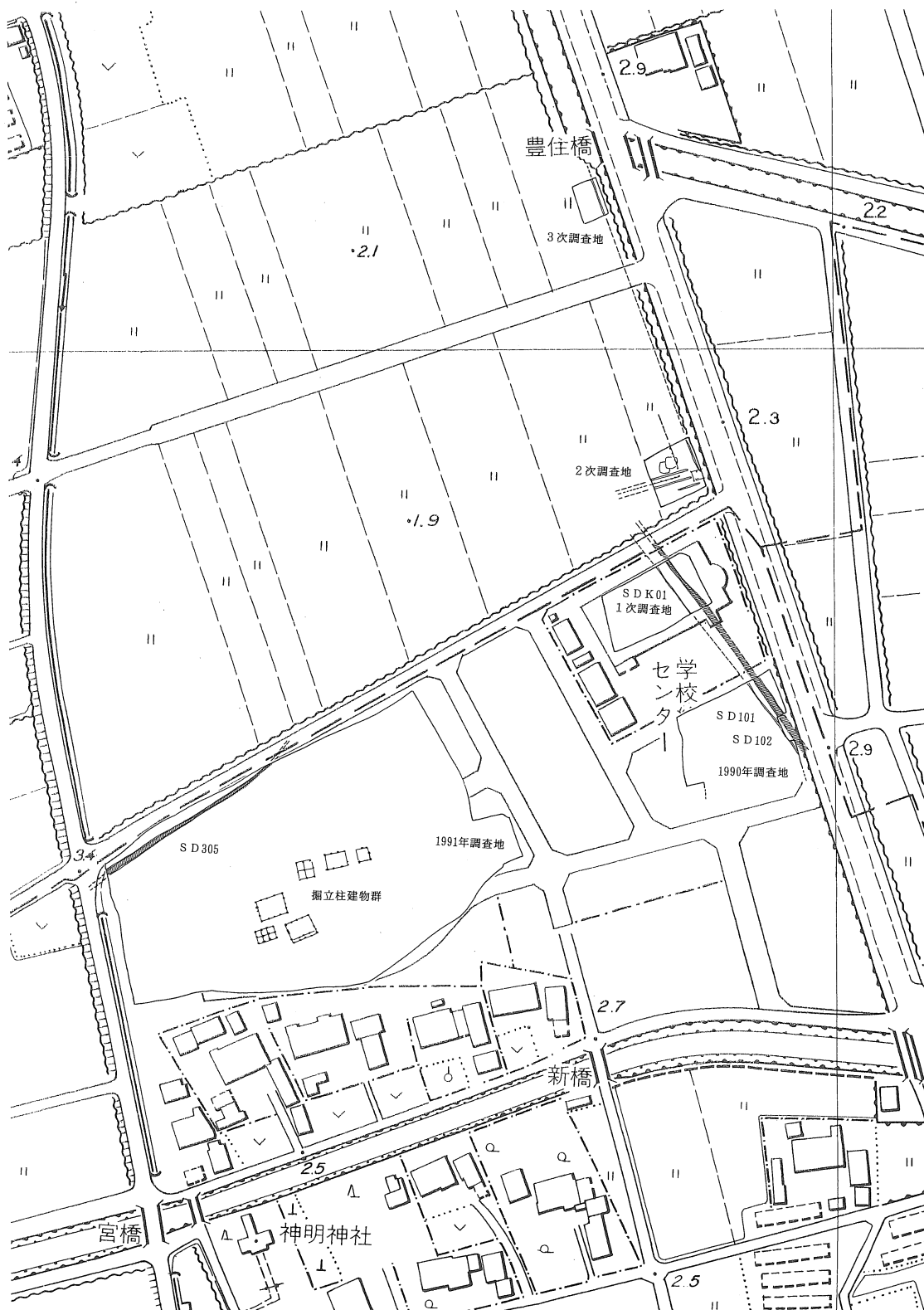


図19 新堀・北ハサマ遺跡の奈良・平安時代の遺構配置(S=1/1,500)

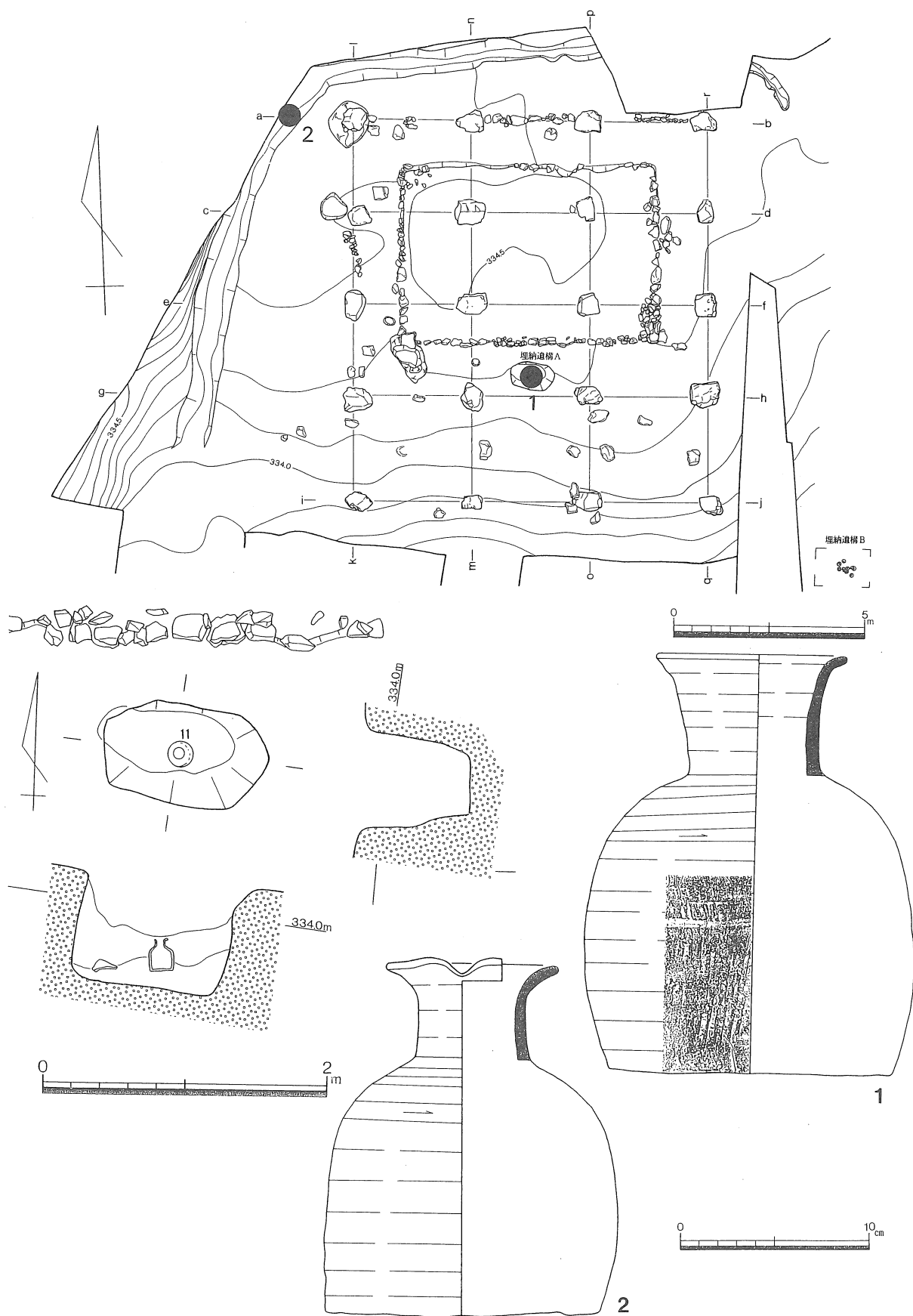


図20 大知波峠廃寺の埋納遺構

新堀・北ハサマ遺跡の性格は更に明らかとなっていくだろう。

2 埋納遺構をめぐる

溝2内に設けられた2ヶ所（土坑1、土器埋納遺構）の埋納遺構は、12世紀前半～中頃にかけての遠江における地鎮という宗教行為を知る上で、重要な資料となるものである。

土坑1では、底部を綺麗に欠いた長頸壺を山茶碗の上に載せたものと推定している。故意に破壊し、それを埋納する、つまり、破壊と封印という宗教行為が行われたものであろう。

土器埋納遺構はこれとは異なり、小碗の上に山茶碗の大碗を被せ埋納する。大碗によって密閉された空間を作り、その中に対象となる地霊や邪気を入れて封印したものと推定している。この遺構は、掘立柱建物1の乾（西北）の隅の方角にちょうど位置し、この建物の地霊に対する封印の呪術を行った痕跡の可能性がある。

このように、器を地面に対し逆さにして（大地、地霊からみると正しい方向）小さな空間を作り、地面に埋めて封印する事例は、同じ浅羽町諸井の十二所遺跡の調査でみつかった11世紀中頃の方形木組井戸でも確認できた。

これは、井戸内礫層上面の三隅に灰釉陶器を伏せて置いたもので、器内部には陰陽道で使われる呪符が朱書きで記されていた。この井戸は他の大型建物群と纏まって一つの区画を構成しており、官衙的な性格を持ったものと推定している。

まだ、知り得る事例は少ないが、地方の公的性格を帯びた施設の中に、陰陽道の系譜を引く呪術を使う宗教者（恐らく、当時陰陽法師と呼ばれたような密教僧崩れではないか）が活躍し始める姿をこのように確認することができる。

北ハサマ遺跡のような、長頸壺を埋納した事例として、湖西市大知波峠廃寺の埋納遺構A（図20参照）を上げることができる。山岳寺院として著名な大知波峠廃寺の伽藍は、11世紀末には廃絶する。その後、跡地を利用した宗教活動が再開されるのは12世紀後半～13世紀前半で、この段階では方三間堂（地藏菩薩が主尊ではないかと考えられている）を唯一の建物とし、周辺に埋納遺構Aや土坑、柴燈護摩壇等を設けた山岳修験の痕跡を示す遺構群が出現する。

これは湖西連峰を中心に活動した三河普門寺や赤岩寺、石巻宮、遠江播教寺、新羅堂等に房籍を置く天台寺門派や真言系修験者たちの入峰の宿として整備されたものと推定しており、それまでの山岳寺院とは異なる性格の修験道場で行われた何がしかの呪術の痕跡であろう。

埋納遺構Aは12世紀後半のもので、廃絶した礎石建物跡BⅡの須弥壇正面に土坑を設けている。ここからはもう1点同様の長頸壺が出土している。図20の2がそれで、礎石建物跡BⅡの乾の隅から出土した。北ハサマ遺跡の事例と共通する出土状態だけに、注意しておきたい。

管見の及ぶ限り、こうした事例の報告は多くないが、恐らく調査担当者も気が付かない祭祀遺構が多いのではないだろうか。今後は類例を増やし、古代末～中世に活動した民間宗教者の足取りを描いてみたい。

[参考文献]

- 佐野五十三 1993『新堀遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
後藤 健一 1997『大知波峠廃寺確認調査報告書』湖西市教育委員会
木場明志監修 1997 淡交ムック『陰陽五行』淡交社

版 圖 真 寫



1. 調査区全景(南方向より)



2. 調査区南部分(東より)



1. 溝1・2、柵1・2・3(北より)



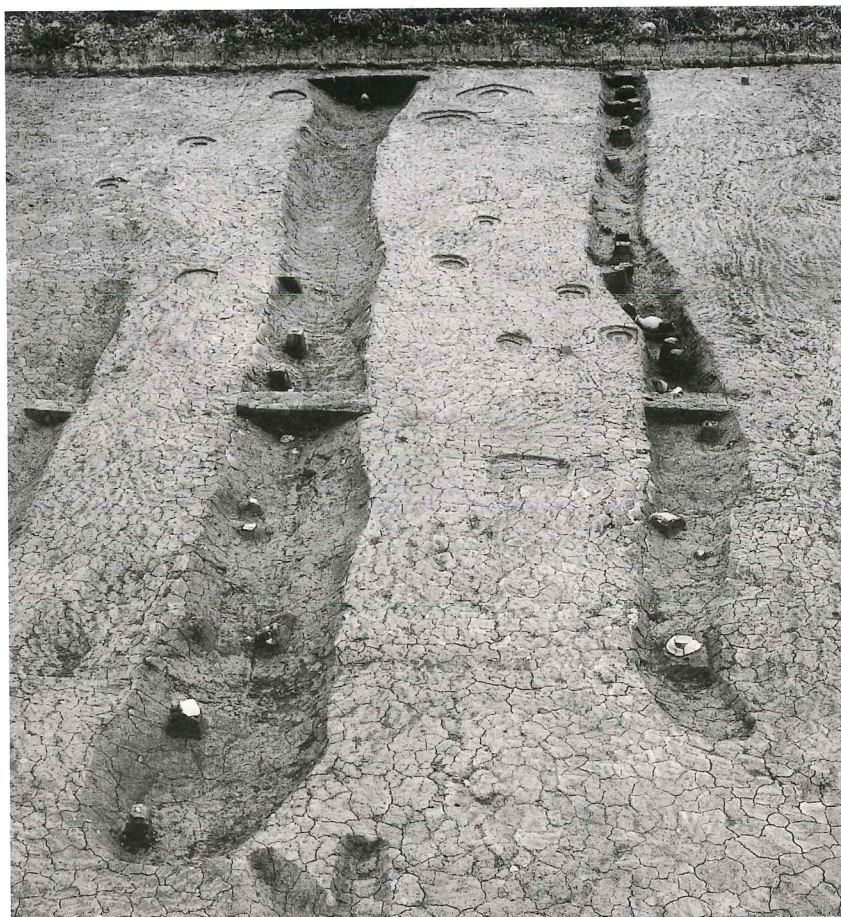
2. 溝4、柵4(南より)



1. 掘立柱建物1 柱穴半載状況(西より)



2. 掘立柱建物1 完掘状況(西より)



1
溝1・2 遺物出土状況(東より)



2. 掘立柱建物2、柵6(西より)



1. 溝1・2、柵1・2・3 完掘状況(西より)



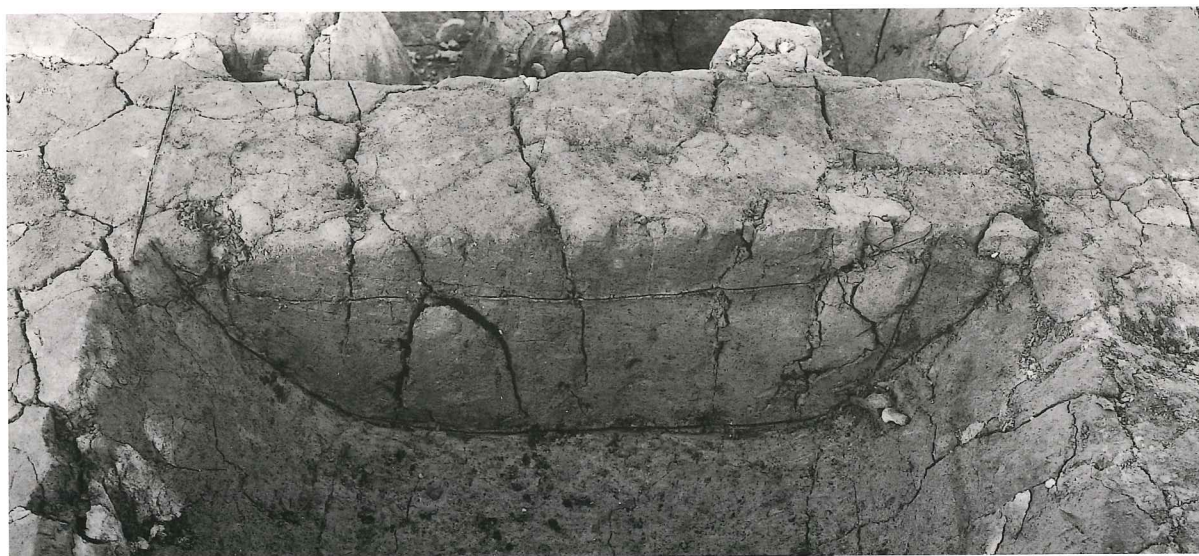
2. 溝4 半載状況(東より)



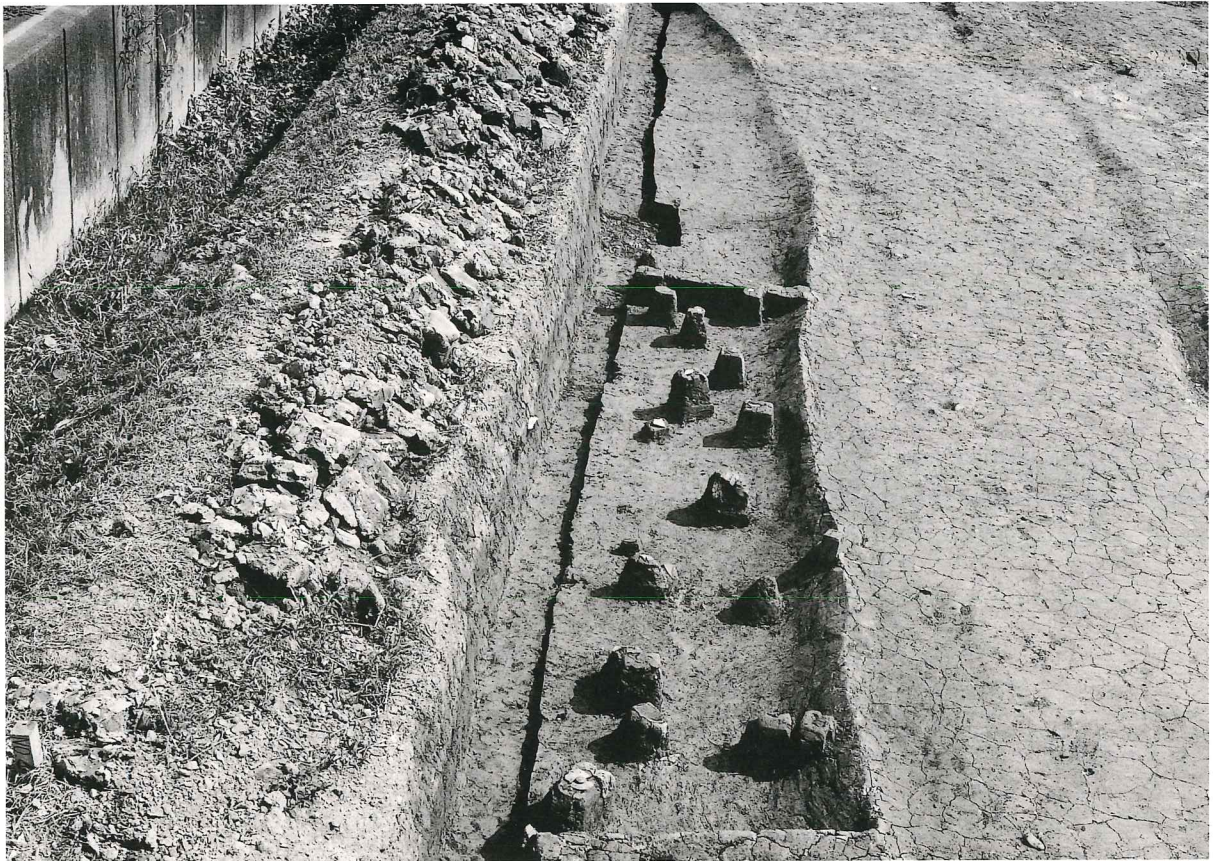
1. 溝1 土層断面



2. 溝2 土層断面



3. 溝4 土層断面



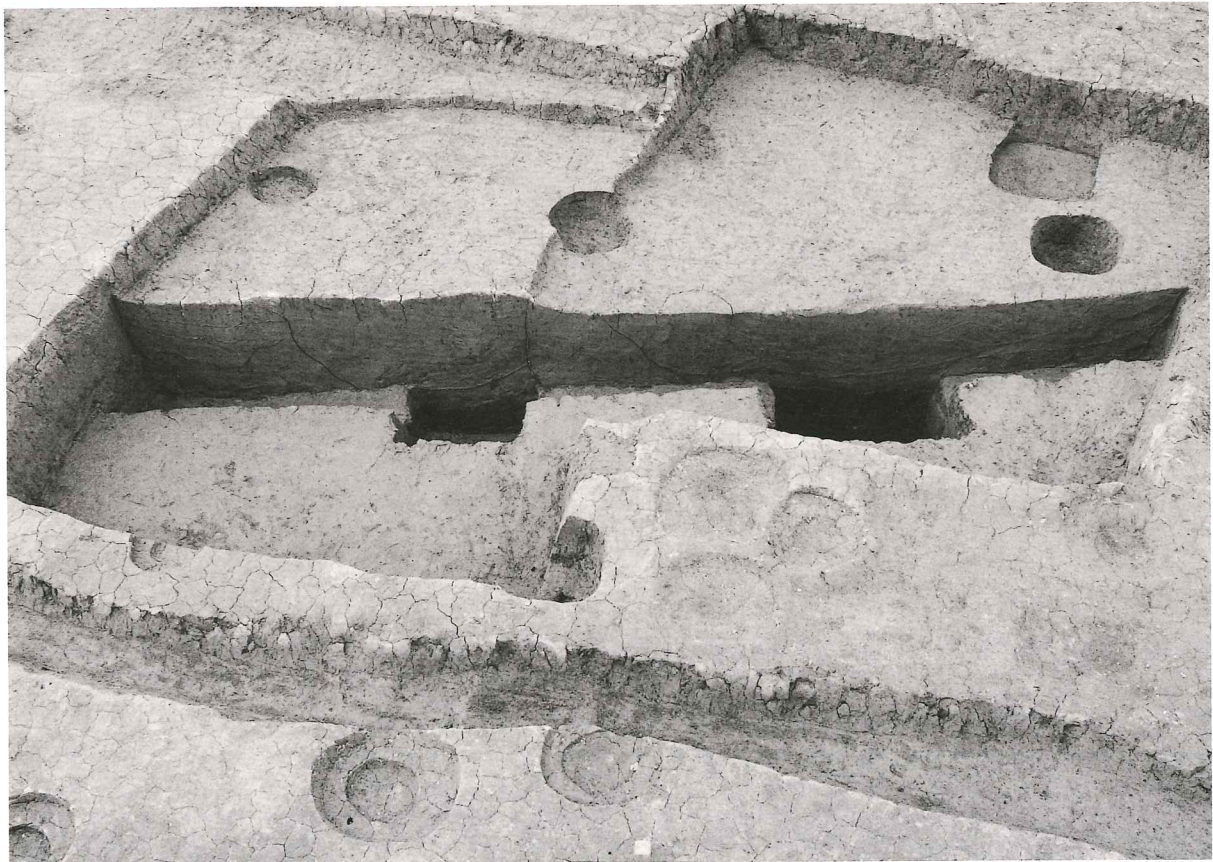
1. 溝5 遺物出土状況(北より)



2. 溝5 完掘状況(北より)



1. 井戸1・2 検出状況(南より)



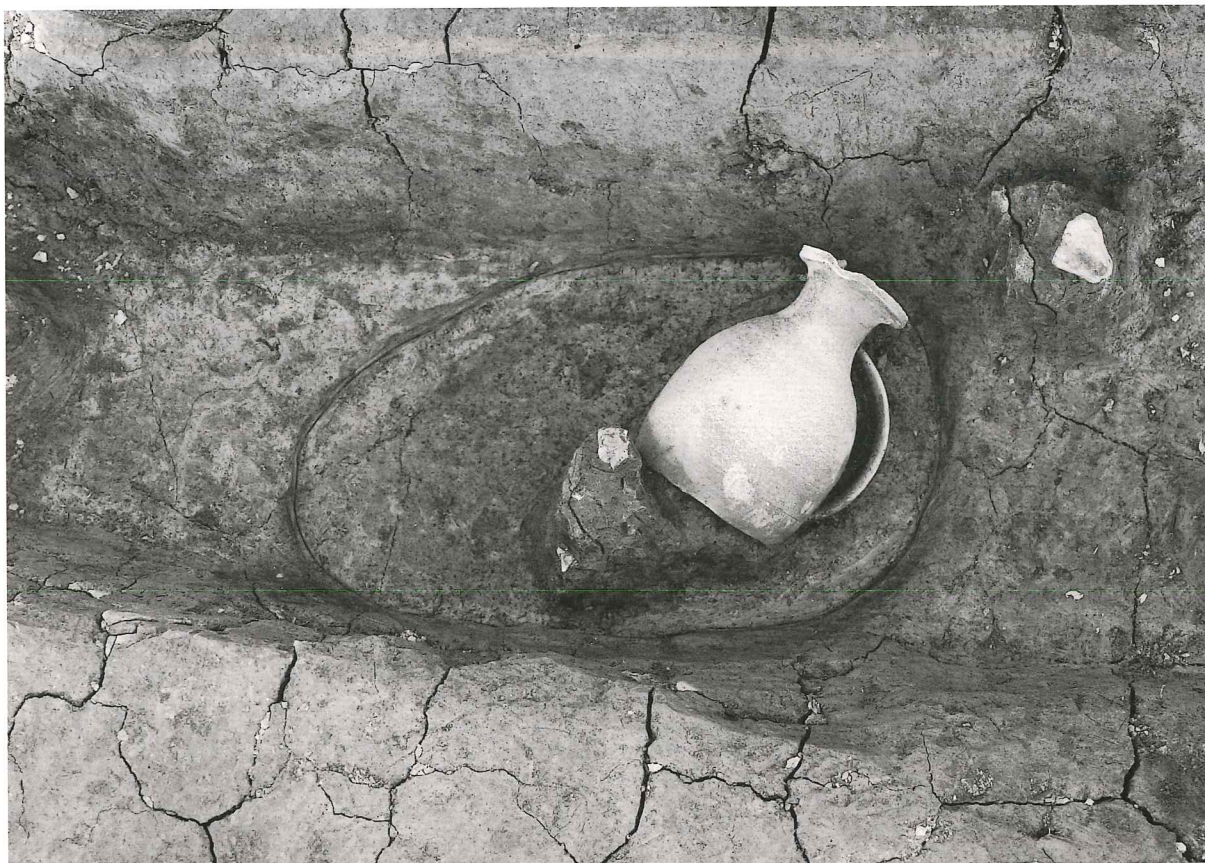
2. 井戸1・2 半載状況(南より)



1. 井戸3 検出状況(西より)



2. 井戸3 半載状況(西より)



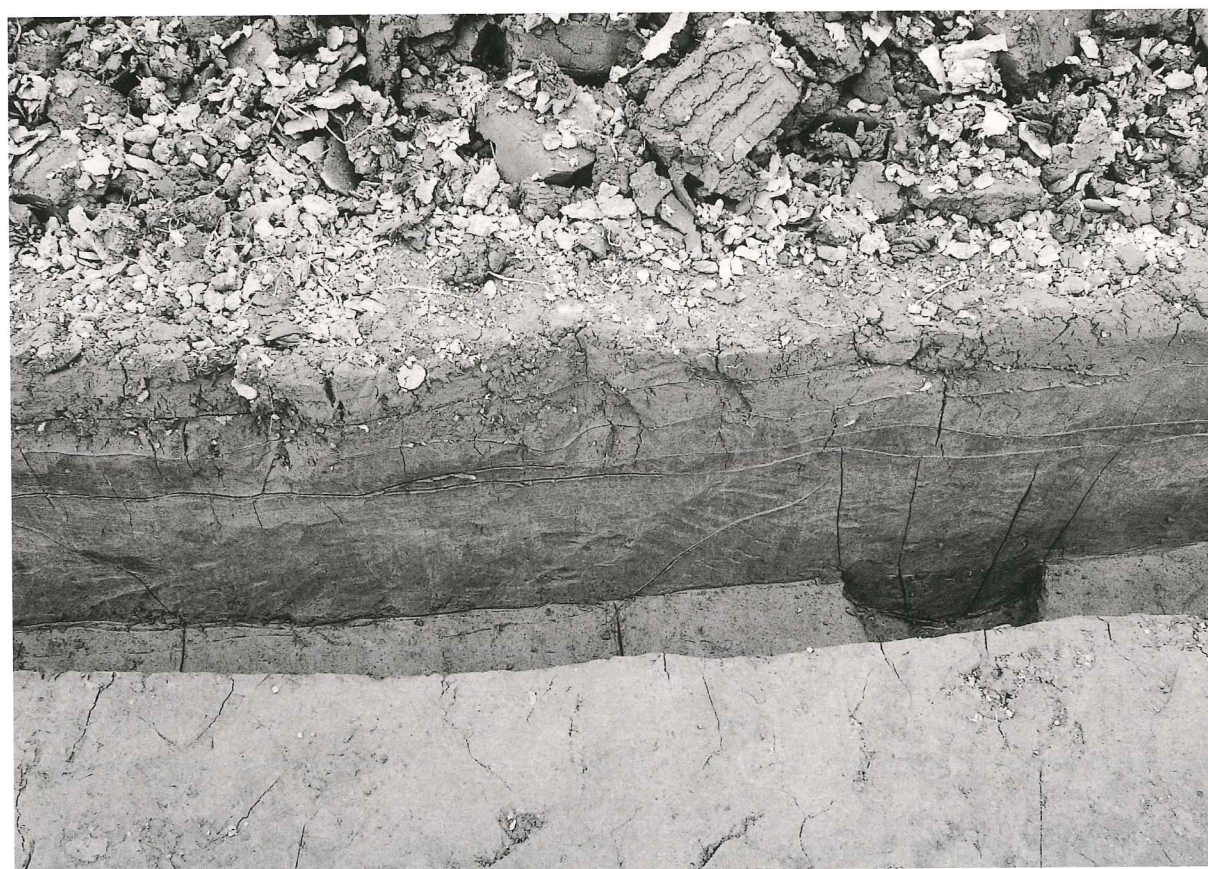
1. 土坑1 遺物出土狀況



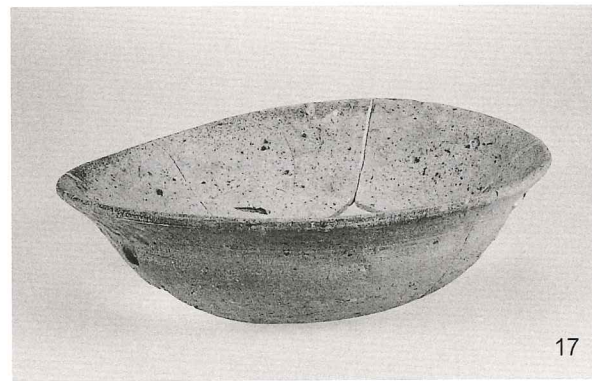
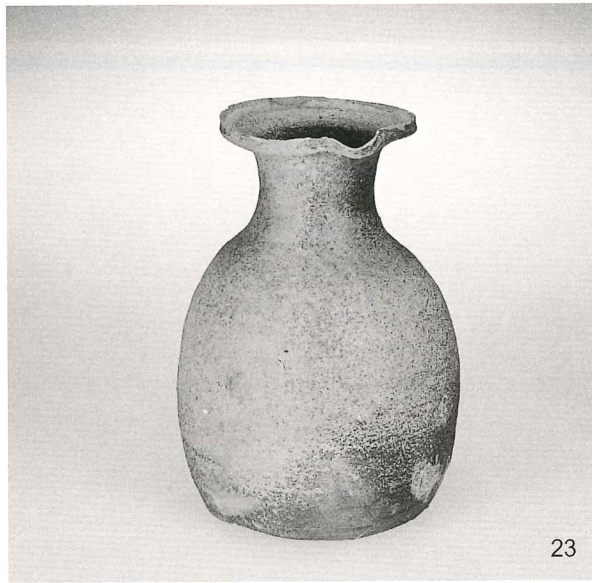
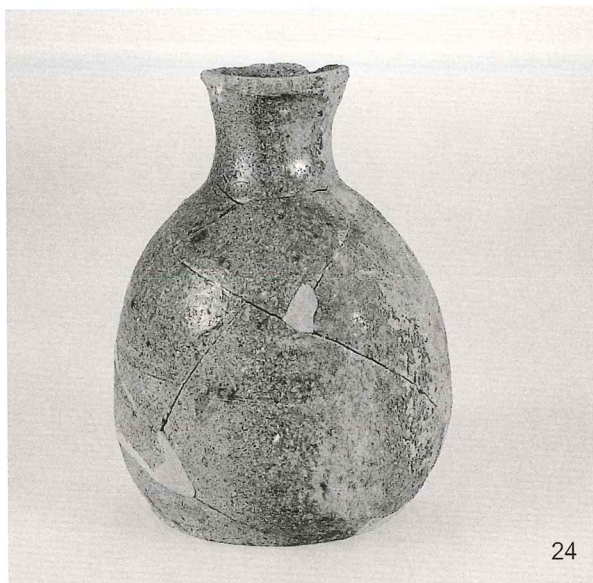
2. 土器埋納遺構



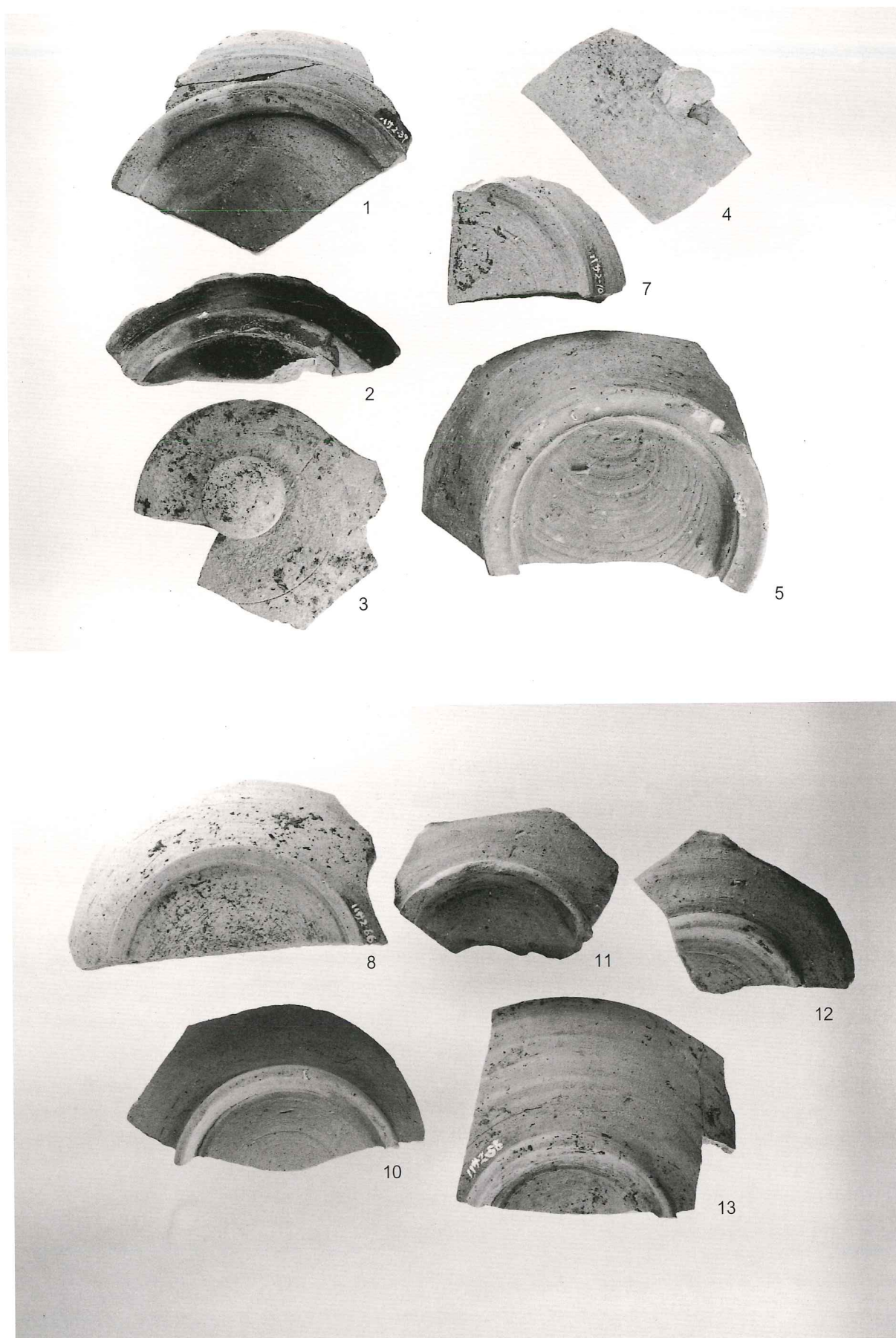
1. 3次調査区全景(南より)



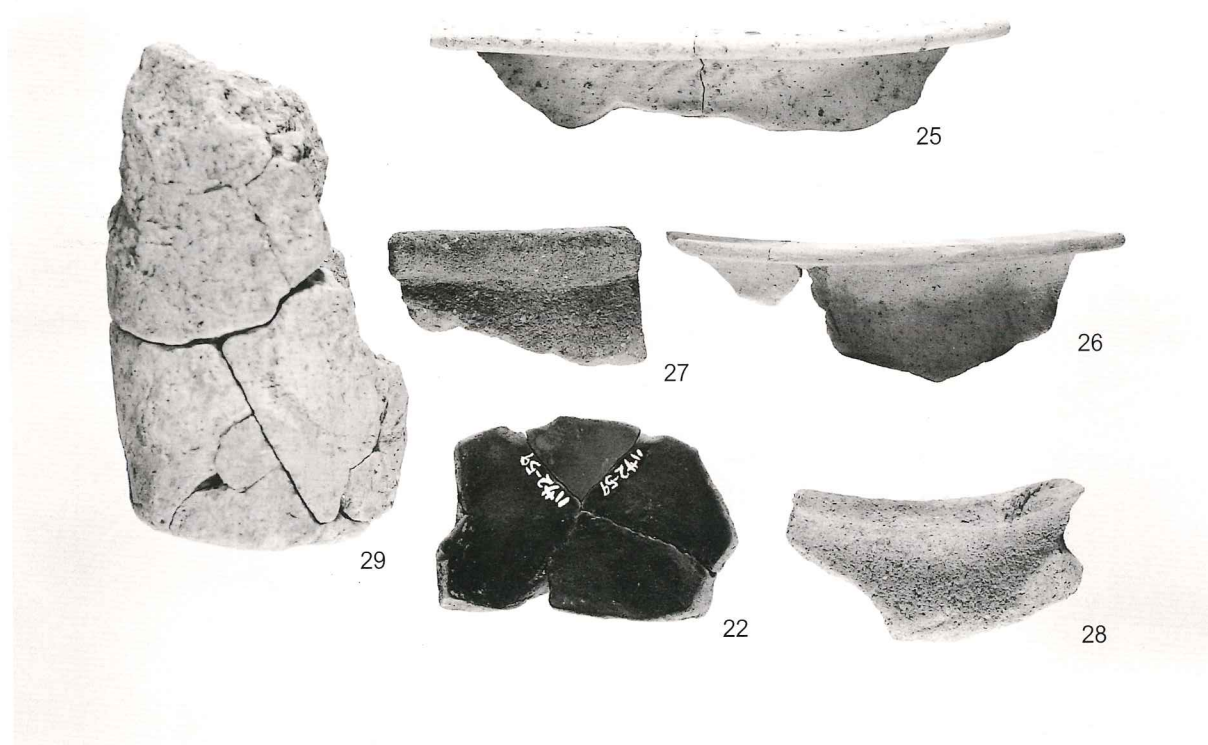
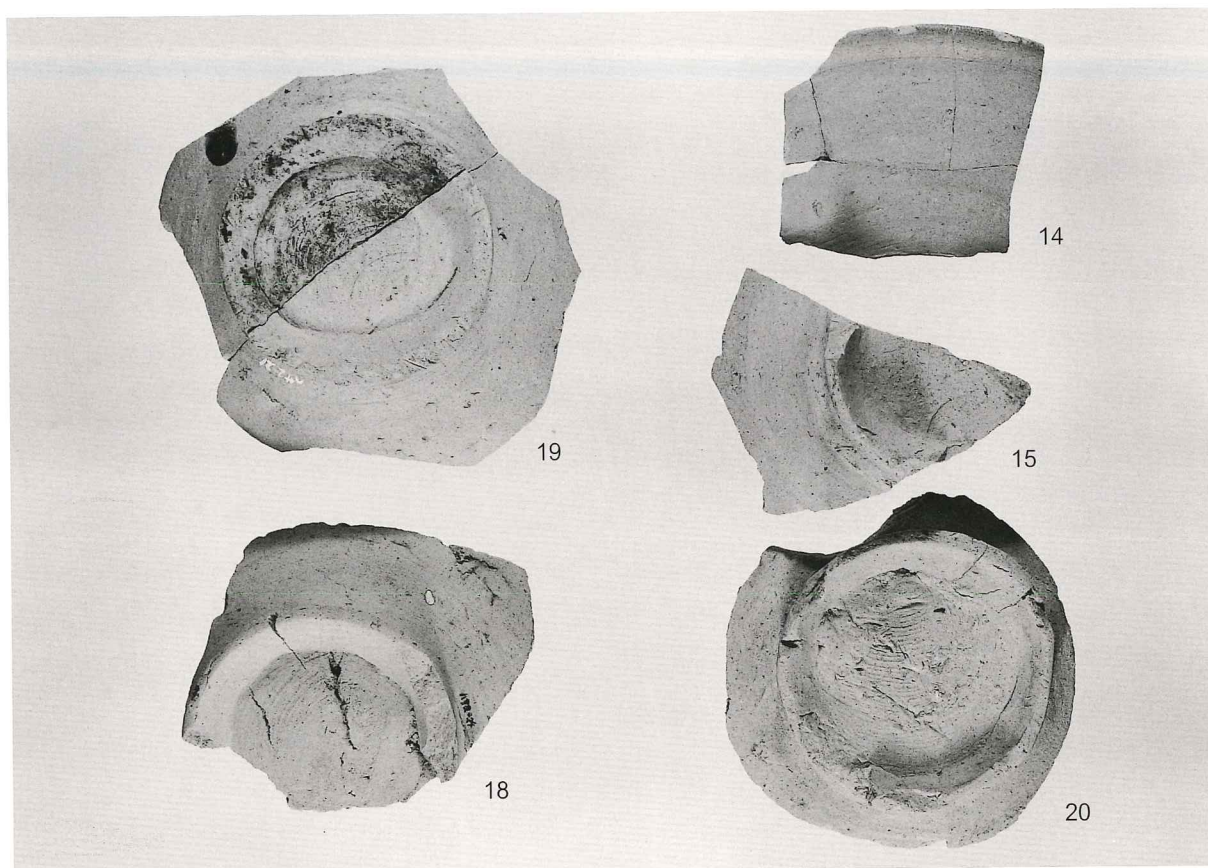
2. 3次調査区土層断面(東壁)



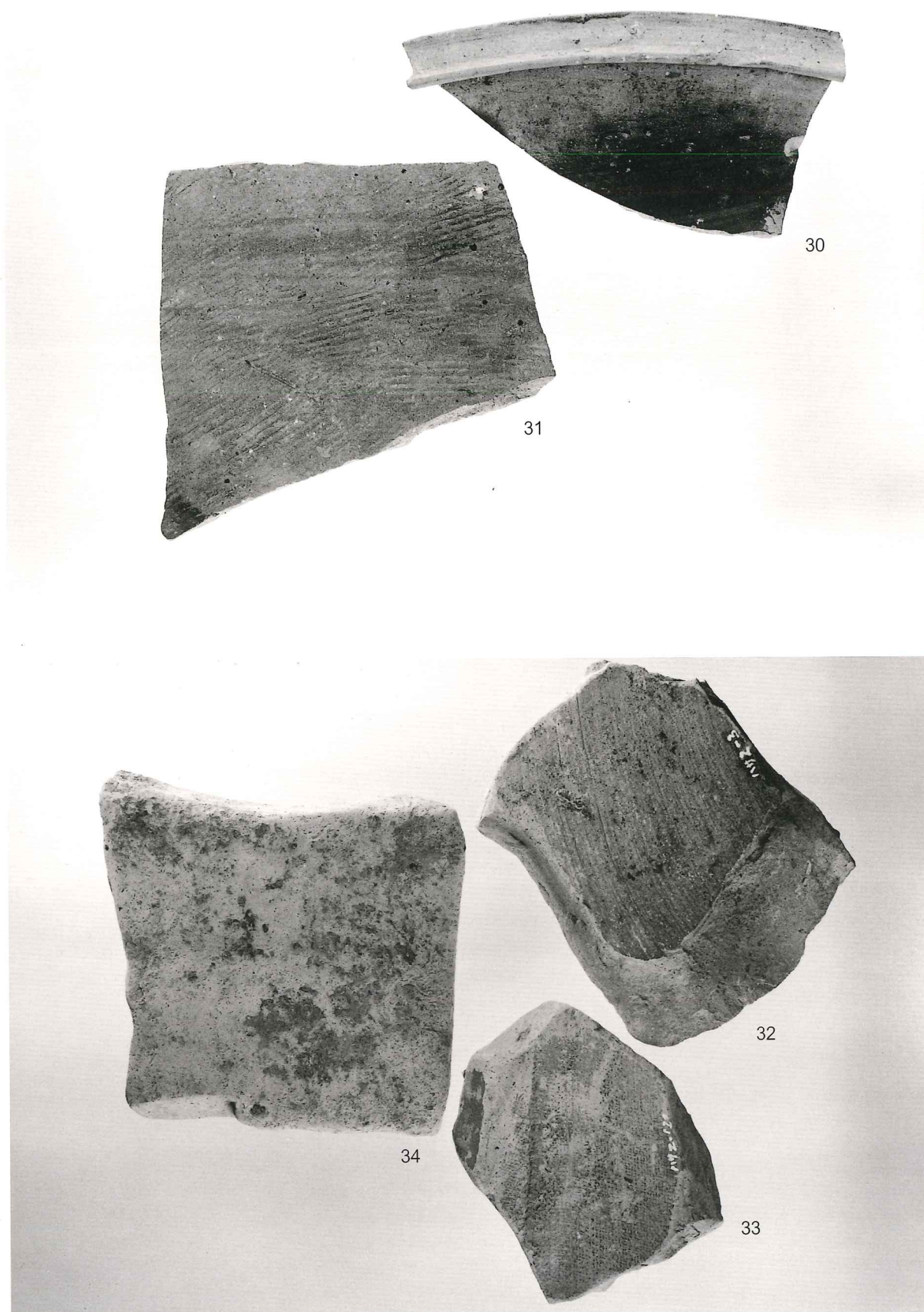
北ハサマ遺跡出土遺物1



北ハサマ遺跡出土遺物2



北ハサマ遺跡出土遺物3



北ハサマ遺跡出土遺物4

報告書抄録

ふ り が な	きたはさまいせき							
書 名	北ハサマ遺跡Ⅱ							
編 著 者 名	山本義孝(編集)、木曾昌司							
編 集 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発 行 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発 行 年 月 日	2001年 3 月23日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
きた は さ ま い せ き 北ハサマ遺跡	しずおかけん 静岡県 いわたぐん 磐田郡 あさばちょう 浅羽町	22481	31	34度 41分 30秒	137度 56分 10秒	1998年 8月6日 ～ 10月22日	264㎡	携帯・自 動車電話 の中継塔
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
北ハサマ遺跡	集 落	奈良時代 平安時代 鎌倉時代		井戸 溝 柵 掘立柱建物 掘立柱建物 柵 溝		須恵器 灰釉陶器 山茶碗	地鎮に関する祭祀土 坑(12世紀前半)、土 器埋納遺構(12世紀 中頃)	

静岡県 磐田郡 浅羽町

北ハサマ遺跡Ⅱ

2001年3月23日発行

編集・発行 浅羽町教育委員会

印刷 静岡県磐田市二之宮 251

株式会社 山田印刷所

TEL(0538)35-6151
